

仮称

“きび”考

2010 年(平成 22 年)秋季号(第 2 号)10 月発行

日本先史古代研究会

仮称“きび”考 2010(平成 22)年秋季号(第 2 号) 目次

○熊山遺跡の出逢いと研究	若狭哲六	3
○会活動 余録		4
○連載 備前焼 ②窯の章	木村玉舟	5
○考古フアンのじゃれごと	山崎泰二	9
仮説-1 神武東征＝弥生の水稲生産の東進化		
仮説-2 弥生晩期(1～3 世紀)日本の中心は吉備だった(楯築墳丘墓は卑弥呼の墓だ)		
○巨石探訪記	延原勝志	14
① 金山巨石群(岐阜県下呂町)		
○来住法悦と日禰書状に関する考察	井上秀男	18
○連載 吉備国の語源「黄蕨」調査報告-2	丸谷憲二	22
こうけつ 黄蕨国の解析『 とつけつ 突蕨国からの渡来者集団が建国』		
○編集後記		29

日本先史古代研究会「設立宣言」

日本列島には、遠く西アジアや中国から、もたらされた「知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・歴史学・民俗学的分野を超えての「先史的見知」により、分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目的に、賛同者有志一同で「日本先史古代研究会」を設立する。

2009(平成 21)年 5 月 30 日

“熊山遺跡の出逢いと研究”

日本先史古代研究会 会員 若狭哲六(当会会長)

私が熊山遺跡と出逢ったのは、鎌倉時代の武将「児島高德公」と三備地方に日蓮宗を布教した「大覺大僧正」は同一人物であったという小著を読んだことから、1984 年 4 月熊山に登ったのが、熊山遺跡を知るきっかけでした。遺跡についての認識は全くない私にとっては、遺跡は、ただただ神秘的な容姿を備えていることに強く心を引かれていたのです。

ちょうどその頃、岡山県では、瀬戸大橋完成を機に「岡山の良さ」を全国に広めようとする企画がなされ、(1)観光資源の発掘整備・(2)観光客受入体制の整備・(3)観光宣伝を三本柱とする観光キャンペーン「あじわいの岡山路」を昭和 58 年から実施していたのです。実施期間は、瀬戸大橋完成時(昭和 63 年 4 月)に向けて毎年継続するとのことでした。岡山県政が、活気的な行政推進を図るため県民に公募した提案制度も、実は「岡山の良さ」を全国に宣伝する要素でもあった。

1984 年(昭和 59 年)私(若狭)は、この機会に熊山についての提案をした。提案の内容は「熊山を再開発」していただきたいでした。その後、知事より一枚の書簡(回答文)が届いたのです。書簡の内容は、山頂の遺跡が指定史跡であるため、その周辺部の大規模な観光開発については、文化財保護との絡み、道路整備の問題、それらと関連する自然保護環境保全等の問題があり、慎重な検討を要するとのことでした。

観光開発の実現は容易でない。しかし乍ら「熊山」を広く世の人々に知って頂く手段としては、「熊山の歴史」そのものの堀おこしが肝要と考えるに及び、以来「耳」・「目」・「足」とでの熊山の歴史、遺跡の探求に入ってしまったのです。私の「心のふるさと」であり、偉大な「熊山」・国の指定「熊山遺跡」は、その実「謎の熊山遺跡」というベールに覆われて何等解明されることなく埋もれようとしていたこともようやく分ってきた。

私の「熊山回春」への心は燃えた。

1985 年(昭和 60 年)には「謎の遺跡」から取り出されていた多様の「遺物」を秘蔵していた地元の古老とも出逢うことができた。多くの遺物は、市井の人には全く知られることなくおよそ半世紀にわたり、他に散逸されることなく地元に残されていたのです。熊山遺跡は、昭和 13 年 6 月、地元の人によって発掘されていた。

その後、当時の一市三町(備前市・熊山町・和気町・瀬戸町)の文化財保護委員会に声をかけ、「熊山語る会」の結成に向かった。しかし、残念ながら、誰一人として快く語る会結成には協力を得られず、有志の者同士での語る会となった。

熊山遺跡からは、発掘によって写真(A)が取り出されていたことが、昭和 24 年 11 月に地元の歴史研究家によって、京大の梅原末治博士に知らされたのである。

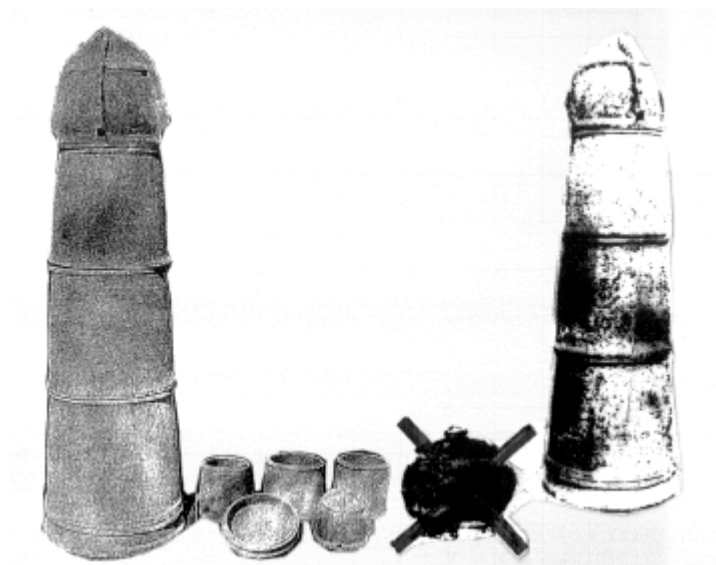


写真 A

写真 B

写真(A)には最初は小壺が入っていないが、写真(B)には三彩小壺入っている。写真(B)は明らかに地元の有志によって

合成された写真であることも、後に地元の人によって証言されている。識者の間ではこの合成写真を以って熊山遺跡を論証しているようである。

梅原末治博士は、昭和 28 年 11 月発行の「吉備考古」＝第 86 号で、写真(A)の論証を述べておられる。

写真(B)は、遺跡発掘より 12 年後に地元の人によってつくられていたものです。熊山遺跡は、梅原末治博士の考証により、『石塔』としての要素を指摘されている。

私はその後、町田章氏にお逢いする機会を得、熊山遺跡より取り出されていた遺物の写真を見ていただくことが出来た。しかし乍ら町田氏は、このようなものが遺跡から出るはずもないし、同時に遺跡は奈良時代若しくは奈良時代までいたらないとの所見をいただいたのである。

若狭(私家説)は、若し遺物が、そうでないということならば、いまだだれもが手がけていなかった熊山遺跡構築による遺跡形態の分析に取り組んだのである。熊山遺跡形態の解説は、昭和 63 年 4 月 15 日の、「先史日本の夜明け・熊山と東西交流史」に自説を載せているので目をとおしていただきたいと思います。＝(岡山県立図書館にある)

近江昌司氏は、「備前熊山仏教遺跡考」・『天理大学報』で、(筒形陶製容器が、果たして熊山遺跡より取り出されていたか否かについては、ある種の疑問を持っているとの指摘もされている。)＝補記しておきたいと思う。



会活動 余録



当会の木村玉舟（陶芸家）氏のお父様たち「焼物にかけた情熱—伊部の三奇人」展が備前市日生町の加子浦歴史文化館で開催中の情報を得た。そこで当会の集まりのあと有志 8 名で見学に伺った。写真右端が木村さんのお父さんで木村宗得氏である。『彼は窯元六姓の分家に大正 9 年に生まれ、お家芸の細工物を得意としますが、一つの作品に観察の時間の方が制作より長くかけ「にらみの宗得」と言われたある種のこだわりの人物でした。』と木村玉舟氏が懐かしそうに解説・紹介していただいた。陶芸作家からの直接の解説も嬉しいのですが、それよりも身近な親族でもあり息子として乗り越えなければならない芸術家としての玉舟氏の気概に接した一日でした。2010.8.27

山崎泰二 記

備 前 焼 ②窯の章

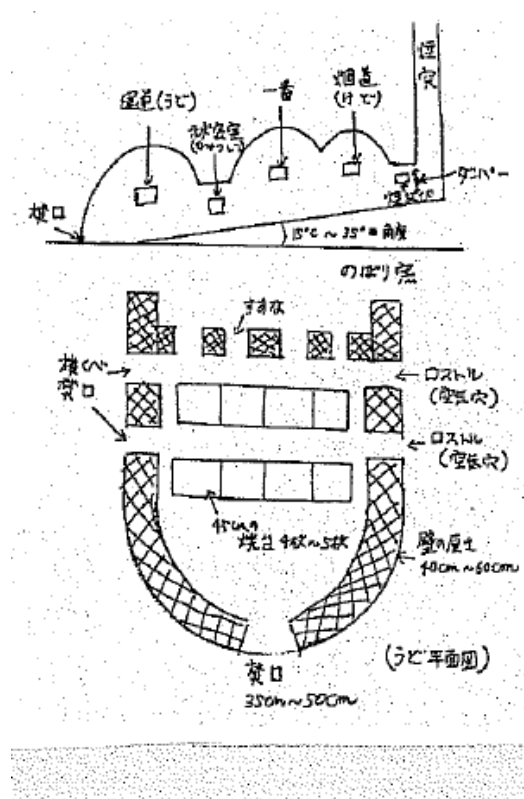
日本先史古代研究会 会員 木村玉舟（備前焼陶彫作家）

お久しぶりです。備前の木村玉舟です。先の創刊号で土の話を書きましたが、多少は解ったでしょうか。土は山土（第一粘土）とひよせ土（第二次粘土＝堆積粘土）のブレンドによりその窯の特性に合わせて作っていくものですが、そこまでしても今度は焼けが問題です。備前は創刊号でお話した様に無釉焼き締め陶器です。薬をかけないで作ったままの状態です。ですからどんな焼けにしようか。又、どうしたらこの形の思いを最大限に引き出せる焼けになるだろうかといろいろ思案する所となります。そういった事が作家の中で固まってくると、その考えを一番かなえてくれそうな窯を作家自身が作るようになります。

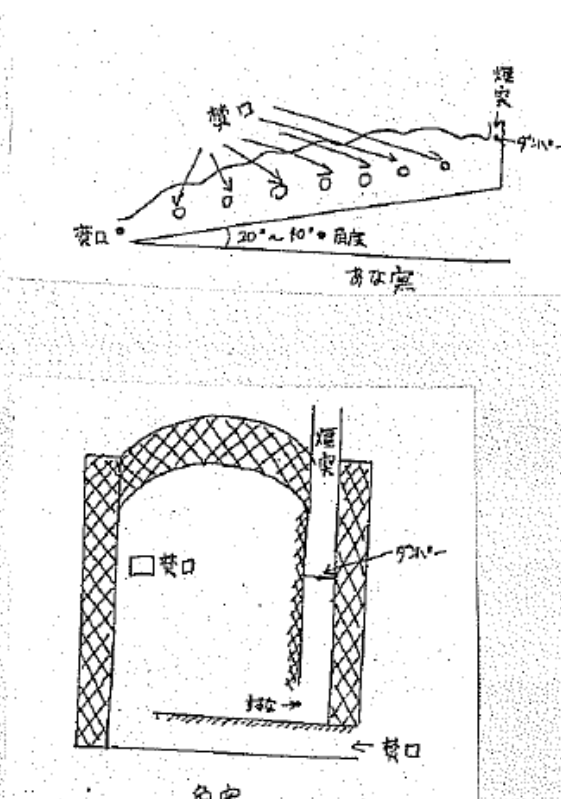
まず第一は**登り窯**です。

平地についても山の斜面についてもかまいませんが窯の正面から煙突の終わりまでの角度が15°位～35°位で人によってさまざまですが傾斜をつけています。なぜかと言うと、炎は低い所から高い所へ登る性質があるからです。そして窯の部屋は一つ一つレンガや土で区切られ「スアナ」と呼ばれる炎だけが通れる穴が4個～8個位あいています。一番前の部屋（運道）が完全に焼き終わると次の部屋（一番）へと順番に焼き上げて最後に煙突に近い「煙遊び」の部屋が終わると焼き口に「どろ」を塗って終了です。（下図参照）

下図は「あな窯」



上の図は「のぼり窯」



上の図は「角窯」

第二は**穴窯**です。（右上図参照）

この窯は登り窯の様に小部屋に分かれていなくてまるでサツマイモ寝かせた様な窯です。この窯も登り窯と同じ様に前から炊いてゆきますが窯の両サイドにたくさん炊き口が作られていて前方から順番に炊きつつ、作品が焼けたのを確認しながら、じっくりと上の炊き口へ移動して行きます。そして上まで炊き終わったら登り窯同様「どろ」を塗って終了です。

次に第三は**角窯**です。

この窯は急に2～300個の注文を受けた時、大きな登り窯とか穴窯では2～3000個の作品が必要な為、又納品の期日に間にあわない場合に使用します。登り窯・穴窯が1ヶ月かかるのに対し角窯では10日ほどで窯出し出来ます。

第四は**電気窯**です。

名前の通りレンガにニクロム線(専門的にはカンタル線と申します)を埋め込んでいる窯です。そしてこのニクロム線に電気を通すと1300度位まで上がる様に設計された窯です。コンピューター内蔵で全自動と半自動が有ります。電源は100V家庭用と200V工業用と2種類が有りますが備前焼は無釉焼きめなので、この窯で焼けるのは「ヒダスキ」位の物で、それもありいい作品は期待できません。

第五は**ガス窯**です。

この窯はプロパンガスと都市ガス型が有ります。そしてこの窯にはガスバーナーが数本窯の下部に取り付けられていて、それを調節しながら焚いて行きます。この窯が電気窯よりいい点は、この窯は炎の状態が酸化(赤い炎)還元(青い炎)と自由に変えられる事です。備前焼は一定の炎で焼くよりもこうした色々炎の状態を変えて炊いて行くほうがいい味が出るのです。そして最近ではこのガス窯に少くならマキが焚けるような設備のある窯も作られる様になって来ました。

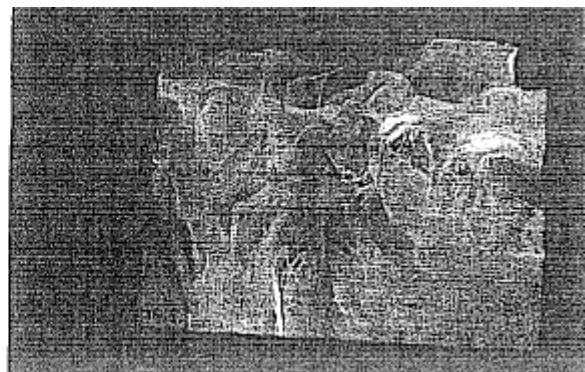
第六に**灯油窯**です。

これは燃料が石油です。送風機で風を送りながら、石油で焚いて行く窯ですが、欠点はこの窯は急に温度が上がりがやすくその為作品が大量に壊れたり、作品に“ぶく”が出来たり、窯の下作品は焼けすぎて上の作品はまだ焼けていない等の失敗はよくあります。その上、出来上がった作品もさほど良くないので、私は嫌いな窯です。

窯の説明はざっとこんな物ですが、次に燃料のことに付いて少しだけふれます。登り窯と穴窯は赤松のマキがほとんどです。1時間に10度位づつ温度をあげてゆき、窯たき終了までの期間は10日から半月を要します。その間のマキの数は1500束から2000束を使います。(マキの大きさは長さ50cm直径30cmで1束だと思って下さい)例えば軽トラックで20杯～30杯の量になります。ちなみに値段は1束400円程です。



赤松のマキは備前焼の燃料



1200℃までマキを入れたところ

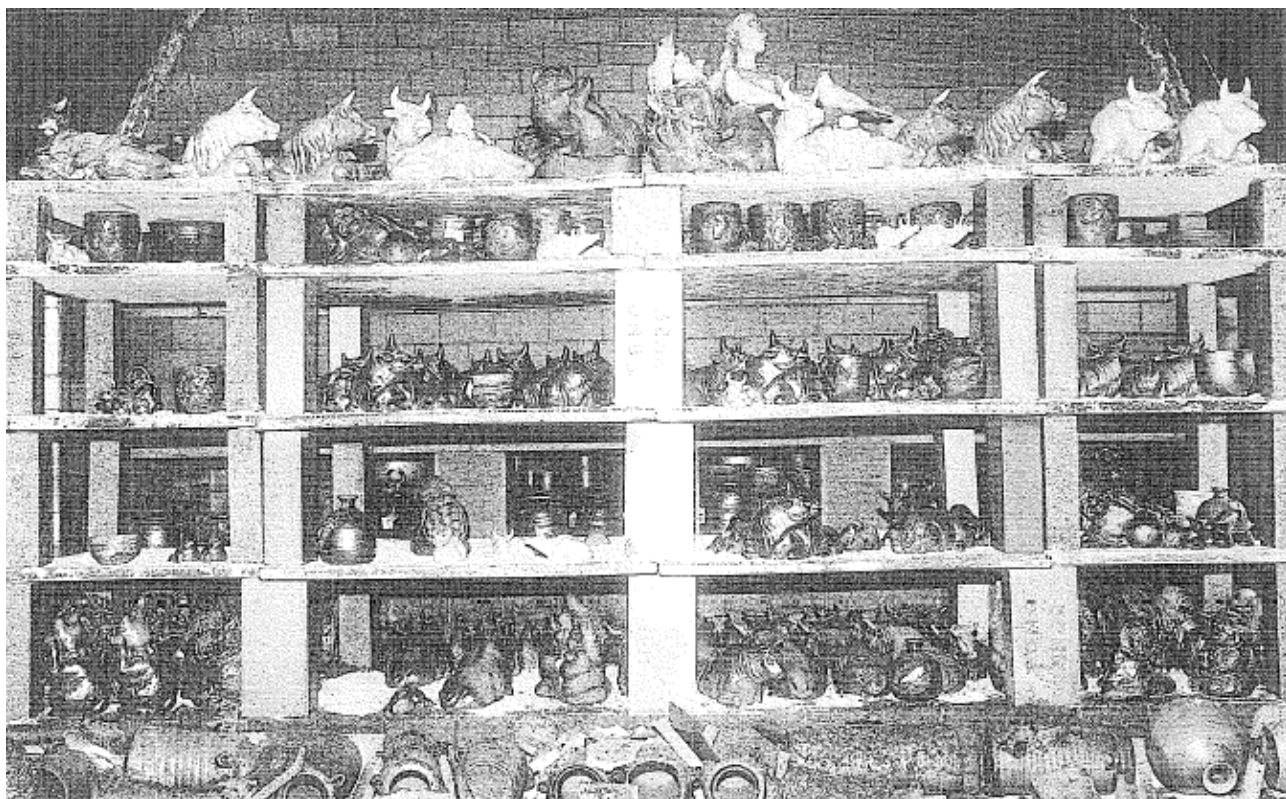
さて登り窯と穴窯はこの赤松で焚いてゆくのは同じなのですが、焚き方は少し違っています。まず登り窯は950℃位までは酸素を多く入れながら焚く酸化燃焼で温度を上げて行き、その後は窯の状態を見ながらダンパー(煙穴と窯の間の板)を開閉させながら酸化・還元をくり返し温度をあげて1200℃にして行く焚き方ですが、穴窯は最後まで酸化燃焼で焼き上げて行きます。

そして登り窯の場合1200℃に達した温度を1～2日維持するのにに対し穴窯はすぐ終了させます。そして焚き終わると窯出しまでの冷却期間は焚き日数と、ほぼ同じくらいと言いますので、少なくとも10日ほど冷やした後、窯出しの時がやっときます。

● 窯出しの日 ●

外の気温24℃窯の温度45℃。今日は良く晴れた日、いよいよ窯出しの日です。窯の前の焚口のレンガをトンカチでドロを払いながら上から順番にはずして行きます。すると窯の正面の焼台には赤松の灰がかかった壺・花入が整然と並んでいるのが目に飛び込んで来ました。

窯開きたところ



運道(うど) 一番上の棚＝白備前 中の棚＝サンギリゴマ 一番下の棚＝ころばし があります。

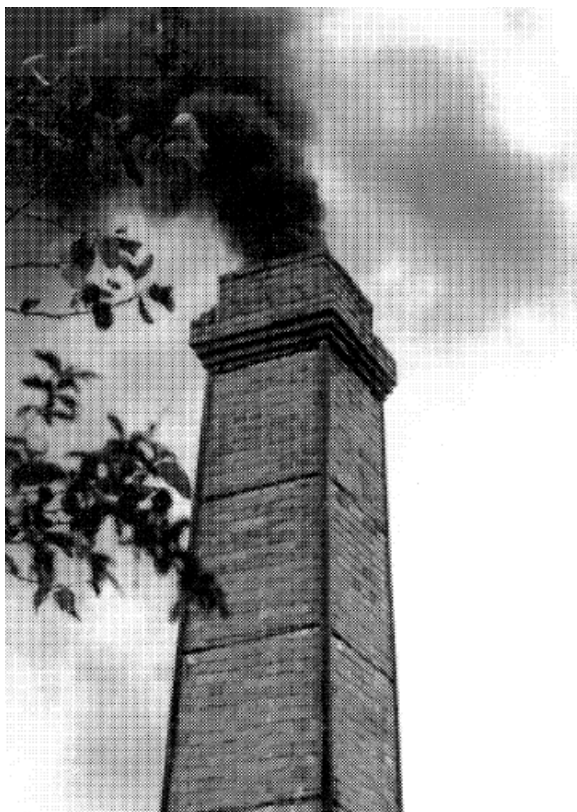
色は上は黄色下が茶色の焼き物です。胡麻(ごま)です。酸化炎と還元炎を幾度と無く、くぐりぬけて色んな色の「ゴマ」が出来上がっているではありませんか。褐色の地に黄色・黄土色の灰がかかったもの、黒地にモスグリーンの灰がかかったもの、がさ付いたゴマあるいはエメラルドグリーンの灰がかかったもの、色んな焼き物が出来上がっています。

取り出そうと窯の中に突入しようとした瞬間足元で「ゴソッ」と何かを踏んでしまいました。そうです、かまつめの最後に窯変をとろうとして、窯の床面に作品(花入・壺)を沢山ころばせていて、それが灰に埋もれたままになっていることに気が付きました。この作品群は「自然サンギリ」とか「窯変物」とか「ころばし」とか言われる物(上の写真の一番下の棚)窯全体作品2000点中わずかに30点ほどの人の力の及ばない自然が作り出す備前では珍しい作品が有る場所です。又、この作品は窯焚き中、この作品群の上に赤松のマキがどんどん落ちて来る所なので、本当にこわれる確立が高いものです。こわれた作品がまだ壊れない作品を生み出してくれています。灰を手で払いながら一点一点キズを確かめながら、取り出して行きます。備前の陶工が一番胸をときめかす瞬間です。えのき肌の下はモスグリーン・赤い丸が3個、オレンジ色とブルーと紫色の「ゴマ」が流れ込んだ物とか、真黒ボディに一条の赤いストライプが走った物とか、一点一点感動の連続です。そして足まわりの窯変物を出し終わった作家は、次にごまのかかった作品を上から順番に取り出して行きます。一番上の作品は灰がまんべんなくかかりあたかも釉薬をかけた様な作品がたくさん出来上がっているではありませんか。そして二段目から下までは窯正面側半分は黄色で裏は茶色の作品が多く見られます。窯の温度はまだ40℃、汗をふきながらどんどん取り出していきます。すると一番下の壺にはお皿でふたをしていたのに気が付きました。お皿を木槌でトントンたたきながらやっとはずしました。

すると中から白地に赤の線の入った徳利が出てきました。ヒダスキの登りです。火たすきは窯詰めの時、あらかじめ稲わらで作品を巻いて壺の中に入れていたものです。火の強さと酸化焼成がうまく行っていたのでしょう。」鮮やかな緋色が走っています。火たすきはワラの数が多すぎると作品の温度が上がすぎて失敗とか結構難しいものです。そしてヒダスキの徳利を5〜6点手にした作家は左手下方に壺のお皿が何かの原因で外れかかった物に気が付きました。よく見ると棚からころば落ちて皿の蓋が半開き、焚き口の方までころばれている作品も発見しました。たぶん焼成中にマキが当たったのでしょ

う。ヒダスキ徳利、失敗したと思いつつ中を開けてみました。何とブルーの肌にコバルトの線の入った徳利が出てきました。青備前の発色です。途中までヒダスキとして完成しようとした徳利マキの攻撃を受けて壺が転んだとき、マキの燃えかすがが周りを取り囲み還元が進んでいたのです。これが本当の自然青です。青備前の徳利を偶然手に入れた作家は、その勢いで前の焼台を全て取り外しました。すると奥からしっとり焼上がった白備前とサンギリは焼が1200℃に達したとき窯の口を空けてあらかじめ用意しておいた備長炭を「センバ」という鉄のスcoopで作品の上にかけたものです。そしてその炭が燃えた時のガスによって色んな色を出す技法で焼成されます。この中には「ぼたもち」という技法も含まれています。40 点ほど並んだ上の白備前をすべて取り出した作家は二段目からは、サンギリ・ぼたもち・伏せ焼き・ラスト……色んな焼けを取り出して行きました。そしてその度作家は次の窯の為にノートに、今出てきたデーターをこと細かに書きながら窯出しは終了しました。後の仕事は奥さんと子供たちが徳利・花入れを区分して「水漏れ検査」を繰り返し、一週間後はお客さまの招待日となっていきます。

次回は備前焼の「焼け」についての説明をお楽しみに！！

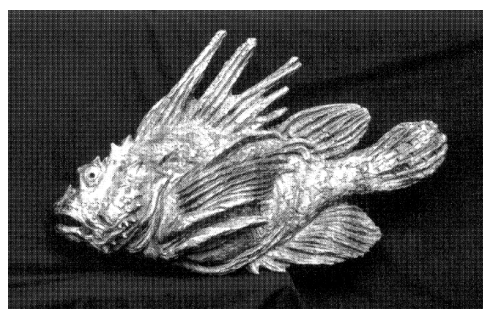


木村玉舟窯の煙突 950℃煙がモクモクと登る



真っ赤な焚き口の温度は？(写真は真っ赤な炎です)

玉舟さんの作品＝魚(うおノ名は？)



“考古フアンのじゃれごと”

日本先史古代研究会 会員 山崎泰二

仮説 1 神武東征＝弥生のお米生産の東進化

この仮説の動機は「稲は連作が出来ない」 嘘(ウソ)！！ 常識からの脱皮

今年は神武天皇から皇紀 2670 年になります。古来日本書紀・古事記(以降＝記紀と称します)の神武東征説は実在しない架空の事象としての評価が定着しているようです。文脈の個々の事例は確かに検証出来ない以上、この評価は止むを得ないのかも知れません。8 世紀の初め日本国家の基礎が固まり新しい固有の文化が輝かしく花開いているとき、記紀の編者である当時の官僚＝学者たちは、1000 年も昔で文字の記録の無いまま、先人の「口伝」のみの記憶に頼っての編纂です。多少の創作は許されるべきです。通説の多くは神武東征を 3 世紀の卑弥呼の時代に重ねているようですが、私は「神武東征＝弥生のお米生産の東進化」と素人なりに信じるようになりました。

岡山には考古学者の高橋護(たかはしまもる)先生が健在です。また吉備学会の食農部会でお世話になっている岡山大学名誉教授の景山詳弘(かげやまよしひろ)先生は農学博士の専門家で退官後は百楽塾を主宰して無農薬農業の実践指導をなさっています。最近このお二人から「目にうろこが落ちる」学びを得ました。「米＝稲は連作が出来ない代表的な植物だ!!!」とのこと。『何々、米は毎年同じ水田で 2000 年も昔から耕作している日本の代表的な穀物で、一番身近な主食でもある。連作が出来ないなんて信じられない』と叫んでしまいました。しかし高橋先生は 2009・21 年 12 月 19 日の彦崎貝塚の講座の中で考古学者としての長い実践も踏まえて「縄文人の主食の一つが米であり、それは小集団の焼畑農耕による陸稲の栽培が中心である」と説かれます。半信半疑でしたが、岡山を代表する考古学者の説です。素人の私は無条件に信じるしかありません。早速農学博士の景山先生にそのことを聞いてみました。「そのことは農学の世界では常識だよ」と簡単に肯定されます。縄文人が長い間お米を栽培していたが連作障害のため定住が出来ず、2～3 年で移住しながらそれでも他の穀物に比べると稲＝米は得がたい食材でした。一方東南アジア・現在の中国の東南部で「偶然の積み重ね」を繰り返しながら「水稻稲作が連作障害を克服する」大発見をいたします。しかし広大な大河の「水の管理」は容易ではありません。水の管理が困難なため単純な農法は最近の東南アジアでも続いています。

弥生人の登場と水耕稲作の技術革命は 2000 年後の今日まで続いている

縄文人は狩猟民族と学校では教わりました。しかし高橋先生のお話にもありましたが縄文人は多様な食生活をしていました。彦崎貝塚(旧灘崎町・現岡山市)では海岸の近くで近海の漁業をし、生活は高地に移動して住居していたそうです。山野の果実(特に栗など)や鹿やイノシシの在来の小動物も重要な蛋白源でしたが、主食は穀物で貝塚から多量の種子が検出しているそうです。中でも稲は他の穀物の中で飛び抜けて多く出土していて当時の縄文人がお米を主食の一つにしていたことが確認できるそうです。小集団(複数の家族)で焼畑農耕を続けながら移住生活をしていたのです。焼畑のためには人手が必要です。人類と共に生きた家畜の犬は鹿やイノシシからの被害を守ってくれていたのでしょう。稲は連作が出来ません 2 年目には 70%・3 年目には 50%の収穫が減ると景山先生から教えて頂きました。次の焼畑を求めて移住しかありません。連作の可能なトウモロコシや小麦の栽培も当然ありえたのに米にこだわる利点が陸稲を続けさせました。稲粃(もみ)は縄文土器で保管し移動しました。海岸での漁労が塩分を補足させ、貝や小魚は日干しにして保管していたのでしょう。貝は時代を経て「貨幣」にもなります。大切な食材でした。石と木で火を起こし石包丁で調理し縄文土器で煮炊きをする多彩な食生活が想像できます。

わが国における弥生人は朝鮮半島経由と中国東南部の海洋から直接九州島に上陸したと考えられています。これらの渡来人は苦勞しながら小船(準構造船?)で漂着した九州島に、「驚きと感動」を得たのです。この東の日の出る国は山々に緑が茂り(中国や朝鮮の山は禿山が多い)小川には清らかな水が留めなく流れています。(中国の河の水は黄色が多い)河口には沃野が開けています。虎などの猛獣も居ません。水耕稲作の最適地です。早速小區画の畝(うね)や畦(あぜ)を作ります。水の管理がし易く、排水路は次の田の給水に繋がります。東南アジアの民は水の力で稲作の連作からは逃れましたが、水の管理の難しさに苦しんでいた渡来人は、この新天地に「安住の地」を得たのです。弥生人として瞬間に日本列島を「水稻文化圏」としてしまいます。弥生文化が発展した最大の武器は「水耕稲作」でしたがそれだけではありません。先に述べた「縄文人の米好き」が影の大きな原因でした。弥生人の渡来は縄文人にとって本来異質の人種で言葉も習俗も違います。衝突があっても当然ですが研究者の多くはこの両人種間の大掛かりな戦争実績はなさそうです。それには主食を「稲＝米」にしている、在来の焼畑陸稲よりは弥生人の持ち込んだ水耕稲作の方が格段に進歩した高等技術であり、縄文人は弥生人に敬服したのが真意と

私は考えるのです。日本の文化は「水の文化」「瑞々しい」＝水々しい「瑞穂の国」とドナルド・キーン博士は今日の日本を評しています。同時に記紀の世界でも「瑞穂の国」を浪々と歌い上げるのです。縄文人から見ると新来の弥生人は「天から降って沸いた」様な大変革であります。在来人から見るとまさに「天孫降臨」の世界なのです。尊敬もしますし無条件に受け入れたのは当然で、渡来早々の弥生人が指導的立場に立っていたことが伺えます。

弥生人の生活の変化

水耕稲作の最大のポイントは「水」と「太陽」であります。水のコントロールは当時の人にとって大変であったと思います。華南の広大な平地と大河川の水を制するのは困難でした。島国の日本にやってきた渡来人は小河川で水量も多く、程よい広さのある河口部から稲作が始まりました。われらが住む吉備の穴海は小河川から出た堆積で遠浅の「吉備の穴海」を形成し、小舟での移動は容易でした。種籾は土器に入れ用具は先の尖った石刀です。水の管理がしやすいように田の面積は小区画の畝と畦で作ります。微妙な土地の高低差を利用して水の再利用を計ります。土地は元々自然堆肥の有機質です。水の管理と太陽の恵み(夏の暑さ)があれば稲の豊作は間違いないのです。今も昔の変わらない雑草との戦いは当然です。外敵の野生の動物は、縄文時代から人類と共生している犬が追っ払ってくれます。穀物は高床式の倉庫で保管したのです。住居は水田の近くの小高い場所に竪穴式住居で家族・部族単位の小集落に住みました。後に環濠集落に発展するのですが初期の弥生社会は争いもなく意外と安全だったのです。岡山の津島運動公園での復元住居が当時を彷彿させてくれます。夜や冬は乏しい灯火で自分たちの衣類を織りました。樹皮を繊維にしたり、獣の皮で丈夫な衣類を作ったのです。山野に居る繭を採取してきたかもしれません。段々と知恵が働き、親から子に伝授されて行くのです。基本の形は「貫頭衣」ですが色彩も豊かに変化したことでしょう。

弥生人の人口増加

稲は保管が出来ますし技術力や耕作の工夫次第で収穫に差が出てまいります。精を出して働けば得るものも多い時代です。しかし人間の力ではどうしようもないのが、今も変わらぬ天と地の「災い」です。神に祈るしかありません。天の神・地の神・山の神・木の神身近な物に神は宿ります。天に一番近い山には天の神・地の神が行き来する神聖な大切な場所として崇(あが)められました。その象徴が「磐座(いわくら)」として今日まで残っています。弥生人の生き生きとした社会に神話が自然発生的に生まれ、神が信じられたことでしょう。記紀の世界では人と神と自然が織り成す神代の国を朗々と語っています。

単位家族も次世代になりますと同じ場所では食材が不足します。同じ川・谷の上流や列島の東へと少しずつ北上し移動してまいります。適地を見つけて開墾し定住する。それが小さい集団として増え続ける。数百年の間に弥生文化が列島をほぼ覆います。縄文時代の1万2000年に比べると大変短く、その上弥生文化がその後の2000年の源流になっているのです。通説になっている北九州が弥生社会の原点としますと、その主な発展ルートは二つ考えられます。まず一つは瀬戸内海ルートです。吉備の地で一呼吸(記紀によると、神武天皇はその東征中に3年乃至8年吉備児島の高島に逗留)して暫時畿内へ進展していきます。もう一つのルートは日本海ルートです。出雲の地は記紀にも多くの痕跡を残します。この時期には北陸までは水稻が普及していたようです。当然出雲文化も伝播しています。四隅突出墳(よすみとしゅつふん)は出雲から北陸まで弥生末期の特殊な文化がありました。同じ様に吉備で発生した弥生末期の祭祀の仕方が「特殊器台(とくしゅきだい)」として出雲にも後の大和にも伝わっているのです。後に詳しく述べたいと思います。

稲作は高温多雨が最適です。寒さには弱いのです。東北はやや遅れましたがそれでも稲作は普及しました。稲作の北上により縄文人は同化・融合され、残った北海道にはアイヌとして縄文言葉や風習がかろうじて残っていました。南九州も隼人族系の縄文文化がしばらく残りますが歴史の進展とともに大和民族の中に融合することになります。

神武東征＝弥生のお米文化の東進

私はこれらの時代を記紀の「天孫降臨」から「神武東征」俗に「欠史8代」とする天皇の記述時代と重ねて考えています。8世紀の優れた官僚も学者も弥生時代の目覚しい進化発展を無視することは出来なかったと思うのです。「瑞穂の国＝大和＝日本」と歌い上げるには、近隣の中華思想に負けないでその上、先進地の朝鮮半島伝来の技術・文化を乗り越えた独自の飛鳥・奈良文化は、彼らにとっても誇り高いものでした。1300年前の平城京の今年の催しを身近に垣間見るとき当時の文化の基礎が、それから1000年前に地固めされた弥生文化(お米文化)に源(みなもと)を得ていることは平城京の役人も認識していました。

天孫降臨は騎馬民族固有の文化であり祖先は騎馬民族との説も有力です。また同じ記紀に海洋民族系の記述も多くあります。中国や朝鮮半島を経由しているうちに中国の当時新しい思想である道教や儒教の教えも騎馬民族の文化も雑多な形で渡来してきたのです。自然と共生していた在来民族はこれらの新しい文明・文化とも素早く共生・共存を計ります。文明開化の幕末から明治のようなものです。輝かしい弥生の基礎を学びました。次は弥生末期、邪馬台国卑弥呼の時代に入ります。

仮説 2 弥生晩期(1～3 世紀)日本の中心は吉備だった

楯築(たてつき)墳丘墓(ふんきゅうぼ)は卑弥呼(ひみこ)の墓だ！！

岡山には戦後の考古学を常にリードされ発掘事例の実績とともに、新機軸を展開され日本を代表する考古学者である近藤義郎先生(1925-2009)と、彼の京大時代の学友である薬師寺慎一(1924-)先生・それに薬師寺先生が師と仰いで止まない郷土史の先人黒住秀雄(1913-1996)先生らの地道な研究が重ねられました。その他岡山大学や県・市の文化財関係者を中心とした、考古学・歴史研究が一定の深みを得て、我々考古歴史ファンを惹(ひ)きつけている。私もそのフアンの一人として、先に「神武東征＝弥生(の)の水稻生産の東進化」とした仮説を立てた。今回は前項の年代に引き続く弥生末期に焦点を当て「弥生晩期(1～3 世紀)日本の中心は吉備だった……楯築墳丘墓は卑弥呼の墓だ」との私なりの仮説を信じるに至りました。

弥生晩期の日本列島の様子

先に述べましたように水耕稲作は弥生人と共に、九州島に上陸してから約 1000 年で日本列島を席捲(せっけん)してしまいました。主に北部九州から二つのルートで移動したのですが、瀬戸内ルートの吉備は単に稲作を押さえてだけでなく、海上航海で南九州の隼人海人と接しその南の中国揚州(江南)長江(揚子江)との交易。それから北部九州の宗像海人経由で朝鮮と交流をしていました。当然日本海ルートで今の新潟付近まで、東海は千葉の先まで海上交易を延ばしていた列島最強の国際集団でもありました。今は亡き黒住先生の論旨は後継者に引き継がれています。先生たちの説を信じれば、弥生末期に於ける列島の中心勢力は吉備にあり、畿内「ヤマト」はその次の時代の中心地になる。前段の地が吉備であったと私は信じます。

楯築墳丘墓の墳形がヤマトの箸墓古墳の原形だ！！

楯築遺跡の発掘者である近藤義郎先生は「楯築はその当時日本列島の中で弥生期最大のお墓」(＝墳丘墓と先生が命名と伺っています)と断言しておられます。その主な理由は先ず規模が当時最大の他、形状が後(のち)の前方後円墳の原形をなす円墳に両突出を持つお墓なのです。片方の突出部を取れば前方後円墳になりますね、判りやすい説明です。同じ頃日本海ルートでは出雲を中心に広島(の)の中央部・鳥取(の)の大山(の)の麓(ふもと)の妻木晩田(むぎばんだ)遺跡から北陸まで「四隅突出墳(よすみとしゅつふん)が点在しますが、弥生末期で断絶してしまいます。これは出雲特有の文化はこれで止まったことを意味します。しかし楯築の墳形はヤマトの箸墓古墳に引き継がれ、古墳時代の基本形である前方後円墳と繋がっていくのです。(箸墓の前にヤマトでは前期前方後円墳が存在しますが過渡的な面を持ちます)

墓は死者の埋葬だけでなく祭祀の場(楯築墳丘墓から始まる)

これは近藤先生も薬師寺先生も共通して強調しておられますのが「弥生時代の墓がこの時期から祭祀の場に変った」との説です。農耕の弥生人は自然との共生でした。当然祭祀は集落で行われました。楯築ではお墓で特別な器(うつわ)を用いた祭祀を始めたのです。特殊器台(とくしゅきだい)の登場です。(命名は前項で登場戴いた高橋護先生で平成 3 年 3 月 23 日の講演でお話なさっています)器台そのものは弥生時代前期から壺を置く台として生活の中で使われていたのですが、特殊器台はお墓で祭祀用に用いられた吉備発祥の特有な器台であります。年代により立坂(たてさか)型・向木見(むこうきみ)型・宮山(みややま)型と大きく 3 区分され共に吉備の国から発信されています。そして何よりも重要なことはこの特殊器台が楯築墳丘墓の墳形が前方後円墳の原形になったように、次々と進化してまいります。吉備で発達した特殊器台は①特殊器台②特殊器台型埴輪(はにわ)③円筒埴輪(えんとうはにわ)へと繋(つな)がり、その後の古墳時代(こふんじだい)400 年間古墳の必需品として進化していくのです。この埴輪は大変重要で例えば旧山陽町の両宮山(りやうぐうさん)古墳は岡山で 3 番目に大きくその上 2 重の周壕(しゅうごう)がある有名な古墳ですが「埴輪」がありません。専門家もその理由を解明できないでいる、それほど重要なことなのです。時代を超えて繋がるものはその意義を当時の人々が認め、認識を共有していたのです。また当時弥生末期の発展地であった北九州・出雲・畿内のヤマトにこの特殊器台の祭祀の仕方が伝播した意味も重要です。単に「物」だけが移動したのではなく、吉備人が移動しそこで吉備式祭祀が行われたと想像してみてください。当時の吉備人の凄(すご)さが判ります。

なぜ弥生末期の吉備で祭祀が行われるようになったのか？

日本古来の祭祀は「磐座(イワクラ)」に代表される自然との共生でした。『天・地・山・木・石・身近な獣に神が宿りそれを大切

に崇めることにより、自分たちが神に守られる』とする自然崇拜に近い祭祀でした。その対象と祭祀の祈りは2000年後(のち)の今日まで延々と現代人の中にも受け継がれています。よってそのこと自体は目新しいことはありません。この楯築の丘の頂部には五つの巨石が立って居り、横たわっています。それ自体が異様な祭祀の雰囲気(かも)し出しています。先に述べた特殊器台を使った日本列島最初の祭りが、ほぼ同じ時代に中国で流行(はや)った「道教(どうきょう)」の祭祀が執り行われたことに意義があります。このことは薬師寺先生が詳しく検証しておられます。(楯築遺跡と卑弥呼の鬼道などの書籍を参照下さい)

注 広辞苑「道教」＝黄帝・老子を教祖と仰ぐ多神的宗教。無為・自然を旨とする老荘哲学の流れを汲み、これに陰陽五行説や神仏思想を加味して、不老長生の術を求め符呪・祈祷などを行う。後漢(25～220年)末の張陵を開祖とし、仏教の教理を取り入れて次第に宗教の形をととのえ、中国の民間習俗に長く影響を及ぼした。

吉備の海人は南九州から遠く中国の最新の文化をこの吉備に持ち込んだ意味は大きいと思います。他のことはヤマトでも出雲でも北九州の吉野ヶ里でも出来たでしょうが、吉備海人と吉備弥生人が稲作の「余剰米」を得てそれを、朝鮮や中国の後漢から鉄などを交易し、近くの沿岸部では製塩技術を特化し加工し、吉備地方がずば抜けた弥生集落を形成していたと柳瀬明彦吉備国際大教授は、我々に分かり易く描いて下さいます。同時代北九州の吉野ヶ里や阪南の池上・曾根の環濠集落が今日大きな話題になっていますが、吉備地域では楯築の近くの上東(じょうとう)遺跡(バラ園付近)では大掛かりな港湾施設があり吉備海人の基地の存在が覗(うかが)えます。隣接する足守川は、その昔は高梁川が今の総社市の中央を東に流れ弥生時代は伏流し幾つかの支流をなして広大な総社平野が弥生時代有力な水耕田でした。聖なる中山の東を眺めれば、旭川の河口部に津島遺跡(津島運動公園・岡大キャンパス)では驚くような木製品が豊かな弥生人の生活を彷彿とさせてくれます。昔「西の大川」と称した旭川の下流に百間川遺跡の発掘が今でも進んでいます。柳瀬先生の「吉備の弥生集落」に詳しいのですが、実はこの文をまとめていた平成22年8月22日吉備国を語る会で岡山大学の山本悦子教授の講演を聞きました。先生の講演は映像を駆使され素人の我々も2000年前の吉備の里村を探訪させていただきました。江南人が発見した水稻耕作が日本列島の弥生人によって量・技術の両面で以降2000年の現代の稲作につながり、稲の連作障害を水稻耕作で克服した「弥生大発見」の事実を多くの我々は忘れ去っていました。「弥生人は集落単位で結束し環濠集落を作り敵に備えた」とする定説に、私は吉備に当てはめるべきではないと考えています、吉備には集落連合の意味合いの強い大きな集団があり、小集落での敵対関係は少なく、それよりも中国の先進文化の「道教」「儒教」を取り入れた「祭祀」が吉備弥生人の大きな特徴なのです。それを支えたのが豊かな水耕稲作による「富」であり楯築墳丘墓を作る最大の原動力になりました。

楯築の亀石と朱(32kg)の意味

近藤先生は1976年から7次に亘る学術調査をなさりその貴重な成果を何冊か出版なさっていますから、大方の考古学ファンの方はご存知のことと思います。この二つは当時の中国の高貴な方が大変好み、我が方の女王卑弥呼も大好物でした。(もう一つ鏡もあります) さて、朱(しゅ)ですがこれは縦穴の木棺(もっかん＝木で作った棺桶)に頭の部分には、4～5cmの厚さにそして足元には2～3cmの水銀朱が32kgも敷き詰められていました。他の当時の遺物からも出土されますが多くの場合は数mg程度だそうです。当時は貴重なもので高貴な方しか手に入りません。不老長寿の薬と考えられていました。近藤先生達の科学的な調査では、出土したこの水銀朱は品質がとても良く中国産のものと判明しているそうです。

注 朱＝硫化水銀 ベンガラ＝酸化第2鉄(近辺で多く産出できました) 共に赤＝紅色をしています

薬師寺先生は単に出土した遺物との捕らえ方だけではなく、一歩進めて魏志倭人伝の記録による「景初3年(239年)に中国の魏王から卑弥呼に与えられた銅鏡100枚と真珠(水銀朱)50斤」のその朱であると論じ卑弥呼の大好物と同じものを好んだ人物がこの楯築墳丘墓の被葬者だと展開なさっています。私は本当のところ薬師寺先生は「卑弥呼がもらった」と断言なさりたいところでしょうが、流石(さすが)専門家としてそこまでは自重なさったと想定しています。

当時の中国では先にも述べましたが特別な不老長寿の薬で皇帝など高貴な方しか入手できない品物です。遠い島国から来た倭人の女王の大好物である鏡(中国では小型で単なる実用品、日本では呪術に使う貴重品)や朱(日本では不老長寿の他に呪術的に使った)を土産に贈った魏王も太腹なら、戴いた卑弥呼もそれを最大限に活用し国内の卑弥呼の傘下の長(おさ)に配りました。(鏡も同様に)それが吉備の楯築墳丘墓に32kgも出土しました。その上発掘時に近藤先生は頂部の巨石に朱の痕跡を見つけたことを正確に記録できなかったと独り言を述べられたそうです。石は無機質ですから不老長寿とは関係ありません。薬師寺先生は親友の近藤先生のひとり言を分析して「もし巨石に紅い朱が塗布されていたならばそれは呪術⇒道教⇒卑弥呼に関係する」と結びつけて、朱は日本では呪術として大切なものであった証であると論証しています。

次にあの不思議な文様を表面すべてに施した「亀石」です。二組存在しその内一つは粉々に破壊され埋葬されていました。これは古代人が祭祀に用いた器などを破壊して破棄した事例が多く発掘され定説になっています。もう一つは現存する形で「ご神体」として今日まで大切にされて参りました。問題なのはその形状であります。例の薬師寺先生は中国の四神・五行の思想で亀の形は「玄武」(北の守り神)であり五行では水の神でありました。弥生の稲作は水と太陽です。特に水のコントロールは

弥生人の生命線です。この中国の同時代の思想が日本列島の中でも吉備の楯築にもたらされていたのです。吉備海人と弥生吉備人の連携で新進の中国の文化が多くの日本列島の民を救い尊敬されたのです。

「吉備の邪馬台(ヤマト)国と大和の狗奴国」 若井正一説

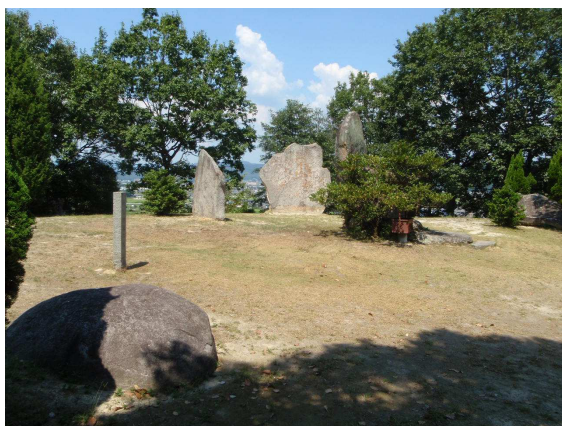
平成 22 年 6 月 26 日私の住む岡山市で全国歴史研究会本部出張イベント＝「歴史を楽しむ会in岡山」が開催され、親友の藤原辰雄氏に誘われて参加した。直前に私が近來主張している「美作後南朝＝植月御所」に関心を持って頂いた、兵庫歴史研究会の幹部 3 名をその主な史跡を案内した偶然も重なり再会を兼ねて参加したのであるが、そのとき全国歴史研究会の会員である、若井正一氏が一冊の自著を携えて参加され紹介に預かった。氏は静岡県掛川在住で大きな病院の医務局長をなさっている現役のお医者さんで私より二回り若いもしっかりした論調で吉備が邪馬台国(一般にヤマタイコクと習いましたが、氏はヤマトとルビを振っておられます)だと断言なさり、一般(通説)に南九州を指す狗奴国(クナコク)を氏は大和(ヤマト)だと主張なさっています。倭人伝によると狗奴国は邪馬台国に属さない(対峙した)国とされ、時に出雲や吉備が想定地に挙げる論者もいます。

予(か)ねて、私は『初期の段階では北部九州にいた邪馬台国の勢力が、卑弥呼の時代にはヤマトに移動(東征)していた。その後の奈良南部の発掘事例から見て箸墓古墳付近に有力な日本列島を代表する勢力が形成され、特に箸墓古墳築造は弥生吉備人の勢力が大きな影響を持っていた』と概(おおむね)そのような認識であり、記紀のヤマトビモモノ姫が、倭人伝の卑弥呼と同一である可能性も否定できないと大雑把に考えていた。しかしこのたび若井正一先生の説に接して、またもや「目にうるこ」の感動を覚(おぼ)えた次第である。氏の説は論証細部にわたり余人の入る隙が無いようにも見える。しっかりした論旨である。是非一読をお勧めします。

しかし私は岡山にて、先の近藤・薬師寺・黒住先輩たちの論説にも親しく接していて、吉備大国を信奉する吉備人として、私の頭の中で纏(まと)めて見ると、若井先生とは少し違ってくる。それが仮説-2「弥生晩期、日本の中心は吉備であった」当時最大の墳丘墓楯築は卑弥呼の墓に違いないと信じるに至ったわけです。魏志倭人伝が考古資料として一級であっても、著作した陳寿(ちんじゅ)は残念ながら当時の日本列島を見ていません。中国から見た「日の出る国」のことを書いている。記載された島や陸路・海路や点在する国々の名前や物理的位置に違いが出るのは当然で、交流はあっても言葉が違い一方ではまだ文字もない相手(日本)でした。多くの現代の諸先生が新説を出されますがそれなりに悩みの多いことでしょう。しかし若井説のように当時邪馬台(ヤマト)国が吉備に存在し、中国から倭国の代表として評価され、一定の国際交流がありえた吉備の邪馬台国に対してそれに属さない国として畿内で実力を持っていた集団が存在することは頷(うな)ける。それが狗奴国(くなく)であると若井説は主張する。

当時の吉備海人は単に瀬戸内海だけでなく、東北アジアの制海権を押さえ、弥生水耕稲作の先進地で富を保有し、弥生文化の頂点にいた。先に見た楯築墳丘墓の遺跡の土木技術はその文化と集団(仮に吉備大国とすれば)は世界の大国である中国も無視できない。そして 248 年に死亡したとする女王卑弥呼がその生前から、吉備の中山の祭祀を司(つかさど)り最新の中国の思想である儒教と道教を吉備海人の力添えで身に付け、単に吉備地方のみならず、弥生文化の頂点に立ち、呪術を用いて列島を支配していた。彼女は当然楯築に埋葬される。倭人伝に出てくる卑弥呼を支えた弟は、今は無き楯築墳丘墓の突出した(今は水源タンク)場所に埋葬されたと想定できるのである。弥生時代の終焉であります。

次の古墳時代は吉備の文化が箸墓古墳の形で引き継がれる。弥生稲作文化はこの後 2000 年の歴史を重ね、これからも続く。そしてその中核をなすイデオロギーは、吉備が何度も経験した「破綻(はたん)からの再起」に学ぶ吉備国際大学教授臼井洋輔教授の年来の説に繋がります。



楯築墳丘墓 「卑弥呼が眠っていると信じている」



と熱く語る 中央石に寄り添う 筆者

巨石探訪紀 ①金山巨石群(岐阜県下呂町)

日本先史古代研究会 会員 延原勝志(陶芸家)

7～8年前の事です、備前焼の中世における流通路について調べていた。基本的には、瀬戸内海の海路が主に使われていたのだが、その沿岸の見晴らしの良い山に神社・仏閣があるのに気付いた。(仮説:光通信の跡ではないのか?)又その山には巨石又は石積み等が有ることが多く、いつの間にか巨石を中心に調べるが多くなっていた。

昨年俳優の近藤正臣さんにその事を話した時、岐阜の正臣さんの別荘の近くに、とてつもない巨石群があるから遊びに来ないかとお誘いを受け行って来た。(正臣さんとは30年近いお付き合いをさせていただいている)方位磁石等を持ち、ワクワクとした気持ちでその巨石群を見に連れていただいて、その大きさに確然とした。又調査も既に済んだ後で、案内板には詳しい説明がされていたので、この金山巨石群の説明版のコピーを紹介いたします。

先ずこの巨石群が出来たのはBC1000～500年前(下記図面参照)に積まれた(完成された)。それは太陽運行と日数の関係から割り出されている。このような急な山腹にこれ程の石を重機の無い時代にかつ正確に積むのは驚きの限りである。又石の磁場(古地磁気学P-17)からみて人間が動かした事に間違いいないと感じた。

吉備地方にも方位岩・巨石が残っていますが、多分金山巨石群と同時期かその前後であり、時代からすれば弥生時代の初め農耕の始まりの時期であり、太陽観測の必要が生じた結果ではないかと考えています。岐阜県下呂町の方に行かれる事があれば、是非立寄って下さいますようご案内申し上げますと共にこの資料を見ていただきご意見などを聞かせて頂けますれば幸いです。

なぜBC1000～BC500年頃?

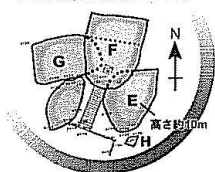
金山巨石群では、岩屋岩蔭遺跡巨石群の内部にある測定石(4年に一度のうるう年の観測が出来る石組)での太陽観測から導き出される数値(*太陽運行と日数との関係)によって、測定石が設置されたと推定できる年代がBC1000～BC500 ころまで遡ることが出来ることから、この頃の北斗七星の運行を再現しました。(*)観測ポイント⑫の説明参照



特徴 1

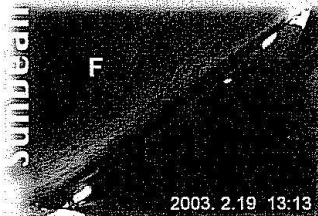
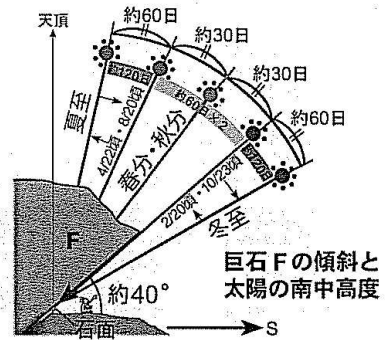
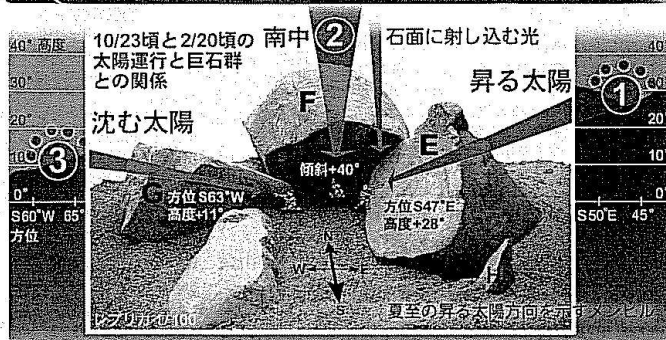
夏至から冬至までの太陽軌跡(方位と高度)の約4等分化されたポイントの観測

N35°45' / E137°09'
岩屋岩陰遺跡巨石群



3カ所にある巨石群はいずれも、夏至・春秋分・冬至といった太陽軌跡のポイントと深く関係しています。特に岩屋岩陰遺跡内では太陽高度の最も低い冬の頃(冬至)をはさんだ約120日間が、線刻石のある巨石群では太陽高度の最も高い夏の頃(夏至)をはさんだ約120日間が石が造る空間の奥深くまで太陽光が射込むこと、又春秋分の頃には岩屋岩陰遺跡内に射し込むスポット光によって、1年の周期(閏年を含む)回帰年を知ることができます。

例(冬至をはさんだ約120日間の観測/岩屋岩陰遺跡巨石群)



日時	太陽高度
2002.10.23 12:52	+39°36'
AD2003/10/23 12:51	+39°42'
AD2004/10/23 12:52	+39°25'
AD2005/10/23 12:52	+39°30'

【太陽方位 S24°33'Wのとき】

岩屋岩陰遺跡巨石群では、南方向に開かれた巨石(E・F・G)の内部全体へ、冬至約60日前から冬至約60日後までの約120日間、太陽光が日中を通して射し込む仕組みになっています。

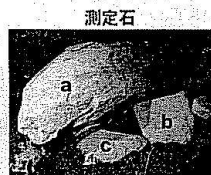
また、左の写真のように、F石の東奥に造られた石面(約30cm×178cm)へ、10/23(12時52分頃)と2/19(13時23分頃)、スポット状の光が当たります。この光の形と位置によって、冬至をはさんだ119日間を特定することができます。

特徴 2

「岩屋岩陰遺跡巨石群」内に射し込むスポット状の太陽光の観測ができる測定石と4年間の数値との関係

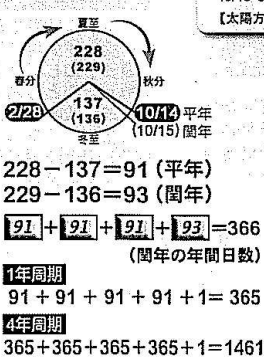
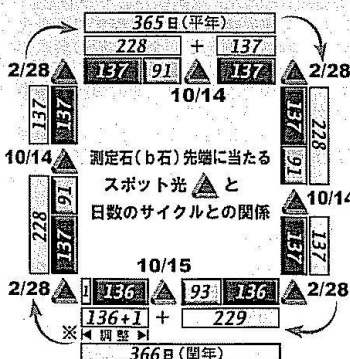
春分・秋分の前後に、巨石群内E石とF石間でできる隙間から、スポット光が射込みます。(写真左) 2000年10月に出現した測定石(写真下)のb石先端に当たる光は毎年10月14日と2月28日にやってきます。(10/14に当たらず、2/28に当たり始める)

この光の観測から、1年約365日の周期が観測でき、また4年に1度、10月15日までb石先端に当たる光によって、閏年(4年周期)を観測することができます。



測定石(b石先端)を照らすスポット光	閏年
2001 10.14 9:30	2002 10.14 9:38
2003 10.15 9:35	2004 2.28 10:00

【太陽方位 E49°12'Wのとき】



閏年を知る(左記の図と数値)

太陽高度と年間日数との誤差を、測定石(b石先端)を照らすスポット光の観測によって左記の数値との関係で考えると

閏年(366日)は4年間(365日×4=1460日)を必要として1日を加える。

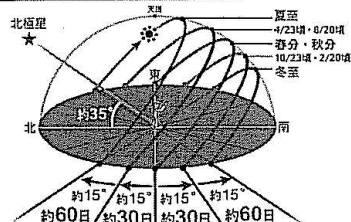
左記の数値【91+91+91+93】(閏年の年間日数)のサイクルから、93の数値の後に1日加わり、閏年366日となる。つまり、3年間【91+91+91】の数値のときは、1日加える必要のないことが判る。したがって、太陽高度と年間日数との誤差は、このサイクルの中で調整され、閏年を知ることが可能となる。

※測定石(b石先端)を照らすスポット光の観測

測定石(b石先端)を照らすスポット光は、365日経つとほぼ同じ位置へ戻ってくるが、僅かな位置のずれが生じる。これは、正確な1年の長さ(1太陽年)が365日と約1/4日であることから、この約1/4日の長さが、僅かな光の位置のずれとなって観測できるのである。(太陽高度と年間日数との誤差) b石先端を照らすスポット光の位置は、1日毎に約4cm移動することから、約1/4日分では約1cmの移動ということになる。したがって、毎年同じ位置に戻ってくる光の位置は1cmのずれを生じながら、4年間で約4cmのずれとなり、ここで1日分の光の移動が生じる。これが閏年に加えられる1日であることが、測定石(b石先端)での観測から読み取ることができるのである。

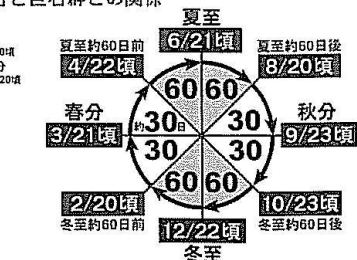
金山巨石群

太陽運行と巨石群との関係



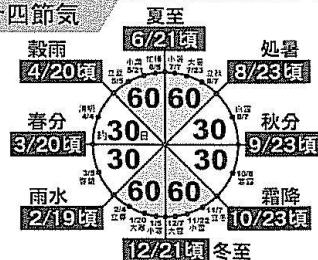
夏至から冬至（または冬至から夏至）の太陽軌跡を4等分した各期間に対応する日の光が射込む

3箇所にある巨石群はいずれも、特定の期間に日の光が、巨石と巨石の間隙や空洞へ射込む、またはその頃だけは射込まないといった仕組みになっています。



夏至から冬至の太陽軌跡を4等分した日数の関係
夏至から冬至までの太陽軌跡を4等分しても日数の関係は4等分にはならず、それぞれ約60日・30日・30日・60日となります。1年は12ヵ月、1ヵ月を30日としていることは、月の満ち欠けと関係があると言われています。しかしこのように太陽軌跡の約4等分と日数の関係からも導き出せることが判ります。

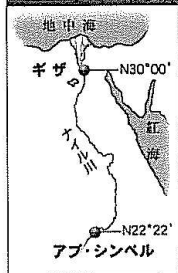
二十四節気



中国の黄河流域の気候に合わせて作られた二十四節気は、旧暦（太陰太陽暦）においては、季節を知る目安として重要でした。季節の移り変わりは太陽運行と密接な関わりを持っています。金山巨石群で観測できる夏至から冬至までの太陽軌跡を4等分した節目の日が、この二十四節気と一致するのは、季節の移り変わる時期が、一年の太陽運行における太陽高度によるものであると理解することができそうです。

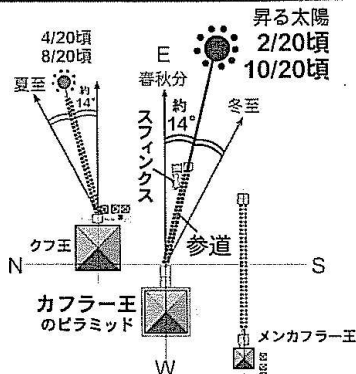
エジプト遺跡との共通性

冬至をはさんだ約120日間



ギザの三大ピラミッド

建造/BC2500頃



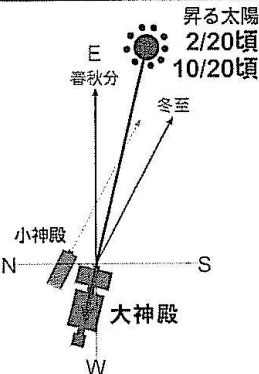
「このクフのピラミッドの東側の基盤の中心の点から、東西方向に対し、北側に約十四度傾いてのびる道がつけられている。また、真ん中のカフラーのピラミッドの東南の隅から、今度は東西方向に対し南側に約十四度傾いてのびる道がある。」

「巨石文明の謎を解き明かす」桜井邦朋 著/PHP研究所 2001

この方向は、冬至と春分の日の出方向の中間に当たります。この方向からは、10月20日頃（冬至約60日前）と2月20日頃（冬至約60日後）の太陽が地平線から昇ることになります。

アブ・シンベル神殿

建造/BC1300頃



エジプト南部ナイル川上流にあるアブ・シンベル大神殿(紀元前1300年頃ラムセス二世が建設)では、朝日が最奥(約60m奥)の至聖所に座る4体の像を照らし出す日があります。それが年2回、10月20日頃と2月20日頃に起こることです。更に隣接する小神殿は、G・S・ホーキングズの調べによると、冬至の日昇と整列していることが判っています。

古代エジプト太陽暦



「ギザのピラミッド」と「アブ・シンベル神殿」の両方から読み取ることができる10月20日頃から2月20日頃までの冬至をはさんだ約120日の期間は、夏至の頃を新年として1年を3期に分けたエジプトの古代太陽暦の、播種成長期に該当します。

アブ・シンベル大神殿



世界の巨石遺構と太陽観測

イギリス ストーンヘンジ Stonehenge



その起源は紀元前3000年頃から始まったと言われます。高さ約5m、重さ約25トンの巨石（北30 kmの丘陵から運搬されたサーセンと呼ばれる砂岩）が円形に並び（直径約30m）、中央から見ると夏至の日の出方向約80m先にヒールストーンと呼ばれる巨石が配置されています。



メキシコ/ユカタン半島

チチェン・イツァのピラミッドとの共通性

このピラミッドは、階段の1段が太陽暦の1日に相当する、マヤの民衆のためのカレンダーを表していると考えられています。というのは、その形状が四角錐で各面の階段が91あるので、これに4面を掛けると364となり、さらに上に乗っている1壇を加えると1年の365日に等しくなるからです。

エジプト 古代エジプト太陽暦 とうせい 狼星周期 (1460年)



BC2900年頃、エジプトではナイル河の氾濫が毎年夏至の頃に関わり、農業や日常生活と重大な関係がありました。

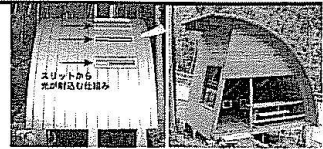
エジプト人は夏になると、曉天に東方からシリウス星（犬座α星）が太陽に先立って昇るのを見て、ナイル河の洪水の時期を予知していました。その周期はほぼ正確に 365.25日であったことも知っていたと言われますが、その観測場所や観測方法は明らかになっていないようです。

また、シリウス星（狼星）が再び同じ暦日に昇天するのが、1460 (365×4) 年後であることから、この周期を狼星周期と呼んでいました。

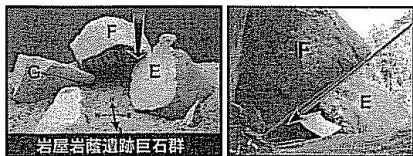
太陽カレンダーシミュレータ『再現館』 さいけんかん



この建物は、2003年（平成15年）12月、金山巨石群での太陽観測の特徴（裏面／特徴1）を解説する目的で建てられました。



何を再現しているの？

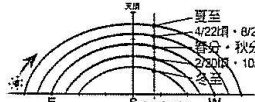


岩屋岩陰遺跡巨石群の庇状になった中央の巨石F（南向きに開かれ約40度の傾斜を持つ）に沿って射し込む太陽光【写真上】と、巨石群内でその光を受け止め、日数を測定できる石面（H30×W180cm）【写真右】との関係を再現しています。



いつの光が射し込むの？

金山巨石群太陽観測の「特徴1」でもある、夏至から冬至までの太陽軌跡を4等分化した節目の日前後の太陽方位が南から24°33'西へ来たときの光が射し込むように設計されています。



なぜ、方位S24°33'Wの光なの？

岩屋岩陰遺跡巨石群内に射し込む光は、内部の石面に当たる位置によって冬至の頃の（約120日間ではなく）119日間を正確に知ることができます。光がこの石面に当たる時間の太陽方位が、S24°33'Wのため、それを再現するためにこの方位に向けて建てられました。



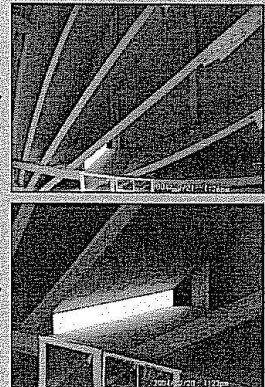
この石面へ光が当たるときの太陽方位が S24°33'W



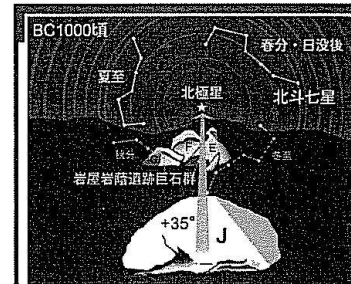
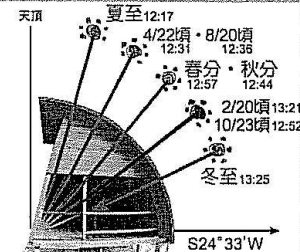
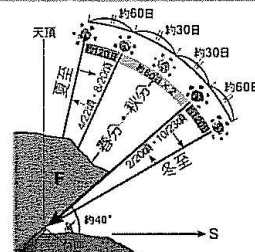
▼岩屋岩陰遺跡巨石群



▼再現館



再現

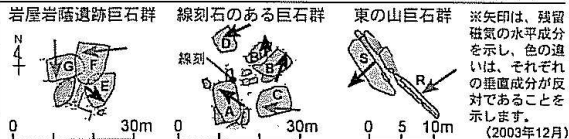


北極星

金山巨石群には北極星を中心とする星空の動きを総合的に捉えていたと思われる巨石Jがあります。

古地磁気学による金山巨石群配列の解明

兵庫県立大学大学院生命理工学研究科地球テクトニクス研究室 森永速男



金山巨石群の岩石種は、約7000万年前の白亜紀の終わり頃に、火山から噴出した火砕流堆積物が固結した凝灰流紋岩である。このような火山起源の岩石（火山岩）は、冷却・生成する過程で、熱残留磁化と呼ばれる安定な残留磁化を獲得する。この残留磁化の方向は、生成当時の地球磁場方向と並行となる。つまり、火山岩は、過去の地球磁場（古地磁気）の方向を記録している。もし、金山巨石群が、風化・浸食に伴う残留地磁気だとすれば、生成後移動していないので、各巨石の残留磁化方向は揃う。一方、巨大地震などにより巨石が移動・回転し現在見られるような巨石群配列が生じた場合や、古代人が目的を持ってこれらの巨石を運搬して配置した場合には、各巨石の残留磁化方向は一定の方向を示さず、それぞれ異なる残留磁化方向を示すと予想される。この熱残留磁化の分析結果から、金山巨石群の巨石それぞれが、移動または回転を伴って現位置に定置したことが分かった。この移動または回転が、どういう過程によるものなのか、古地磁気学的に示すことはできないが、少なくとも風化・浸食の過程で取り残された残存地形ではないと判断できる。



古天文学創始者／元東京大学教授（2003年2月没）
金山巨石群アドバイザー 齊藤国治

「この遺跡がユリウス暦でなく、グレゴリオ暦に相当する配置であるなら、紀元前の遺跡でも季節の誤差はさほどないだろう」
月刊天文2002.7（取材）肥沼茂夫
「ますます確実となりゆく古代天文観測台の正体の発見はすばらしい業績です。」（2002.11.15）



日本日時計の会会長／日本暦学会副会長
金山巨石群アドバイザー 後藤晶男

「イギリスのストーンヘンジをはじめ、巨石と太陽祭祀とは、古代から密接な関わりを持っていたが、季節を知るための暦としての役割も合わせ持っていたことは衆知の通りである。金山の巨石群は、閏年まで知ることのできる精度を持った太陽観測のための巨石群であることは驚きである。」（2002.12）



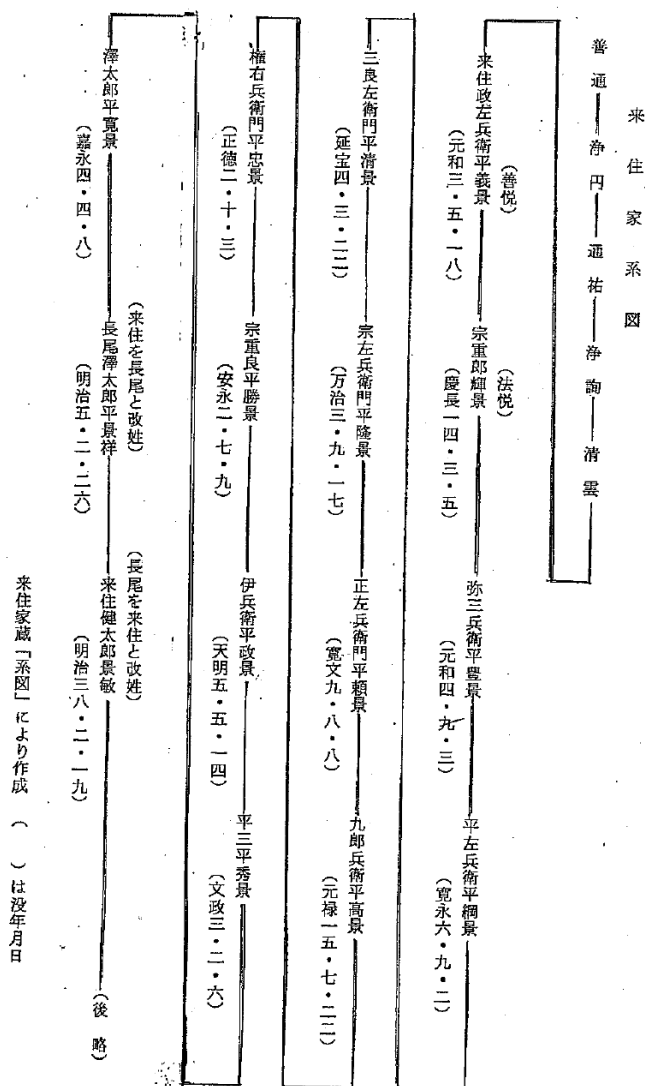
早稲田大学教授（エジプト学研究） 吉村作治
「縄文人のキープレイスカ！？縄文集落の長老が集い太陽の運行を基準に何かのガイドラインに使ったのではないかと直感した。密林のマヤ文明と似た環境である。」（2003.5.31）

き しゅ ほう え つ に っ し ん
来住法悦と日禪書状に関する考察

日本先史古代研究会 会員 井上秀男

1. 来住法悦と浦伊部について

JR赤穂線伊部駅から宇野バスで浦伊部で下車すると片上湾の近くから入った所に太閤門がある。来住法悦が建築したと伝えられる、近くに来住家の菩提寺の妙圀寺がある。浄光山妙圀寺は堀河帝の永長年間(1096～1099)多田満仲 5 代孫多田明国の創建と伝えられる古刹で貞治 5 年(1366)天台真言の両部から日蓮宗に改めたと伝えられている。浦伊部は、以前は和気郡浦伊部であった。現在は備前市浦伊部となっている。この地に戦国時代から江戸初期に活躍した豪商の来住法悦がいた。来住宗重郎平輝景で(～1609)諱は重治、号は掬圓斎と名乗った。来住家の由緒書によると祖先は讃岐国高松の牢人で来住政左エ門平義景の子供、来住法悦の時に浦伊部に来て、今までの長尾姓を改めて来住氏を名乗ったとされる。詳細は定かでない、姓氏研究等の本には苗字と地名は共通の場合が考えられるとのことで大日本地名辞書(吉田東伍著)で四国の讃岐の条を開き調べてみた。香川県には長尾姓も多くあるという姓氏辞典を調べる方法もある。地名辞典に讃岐国寒川郡の条に長尾郷、長尾村が記されていたが詳細なことはわからなかった。来住氏については播州国加東郡に来住村として江戸期の村名として地名辞典に記されておる。来住(きし)と呼んでいる。貴志荘(きししょう)として鎌倉期～南北朝期に見える荘名とある。来住氏に関する文献として播磨国後風土記第七巻、古城の部に来住城あり、加東郡来住郷来住村と見え、城主多田満仲の末裔として、来住安芸守景政子源三郎景利皆武勇也……云々後略す……と見え浦伊部の来住家との関係があるかどうか調査研究をしてみないと定かでない。

来 住 家 系 図

2 来住法悦と豊臣秀吉の関係について

天正 10 年(1582)3 月の来住家文書に羽柴秀吉からの禁制をもらっている。この 5 年前の天正 5 年(1577)10 月、織田信長は中国攻めの決意をして羽柴秀吉には播磨を、明智光秀・細川藤孝等には丹波・丹後を攻略させ、山陽とさんいんの両方面から毛利氏を攻める作戦を立てる。羽柴秀吉は姫路城を根拠地とし毛利氏に属する諸城を攻め 11 月には播磨を大体平定し天正 8 年(1580)正月ごろ、別所長治の三木城を攻略し 5 月には但馬を平定し、次に因幡に入って毛利氏の将の吉川経家の守る鳥取城を兵糧攻めで天正 9 年(1581)10 月開城させた。そして秀吉は備中攻略の準備を整えて天正 10 年(1582)3 月、播磨・但馬・因幡 3 カ国の兵をひきいて姫路城を発し、5 月毛利方の将、清水宗治の守る備中高松城を包囲して、俗に伝えられている「備中高松城の水攻め」である。この頃来住法悦は、高松の役の帰途に秀吉が来住家に立ち寄ることを約束していたので、秀吉を迎える為に御殿と門を新築したと言われている。しかし天正 10 年(1582)6 月 2 日未明に明智光秀が京都の本能寺で織田信長を殺害した本能寺の変である。この知らせ得た秀吉は、直ちに京都へ馬を走らせる。俗に言われる秀吉の「大返し」で結局浦伊部の来住家に立ち寄ることが出来なかった。築造された御殿は来住家の菩提寺の妙国寺の客殿として寄進されたが、太閤門と石垣は 400 年後まで風雪に耐えたが、老築化が進み地元の人達による保存会が設立され、現在は太閤門の由来を書いた石碑が建立されている。

3. 来住法悦と宇喜田秀家

豊臣秀吉の養子宇喜田秀家が岡山城を修築する時に来住法悦は用銀の調達や一櫓寄進する等の支援をしている。又、宇喜田秀家からの岡山城下に材木町一町をもらっている。(来住家関係文書参照)文禄 3 年(1594)には国中諸役免除の特権を受ける等宇喜多氏との関係も深いものと受け取れる。法悦は慶長 6 年(1601)に岡山城下の家売り払って浦伊部に住し、妙国寺の再興や京都の常寂光寺の建築に尽力を注いだ。

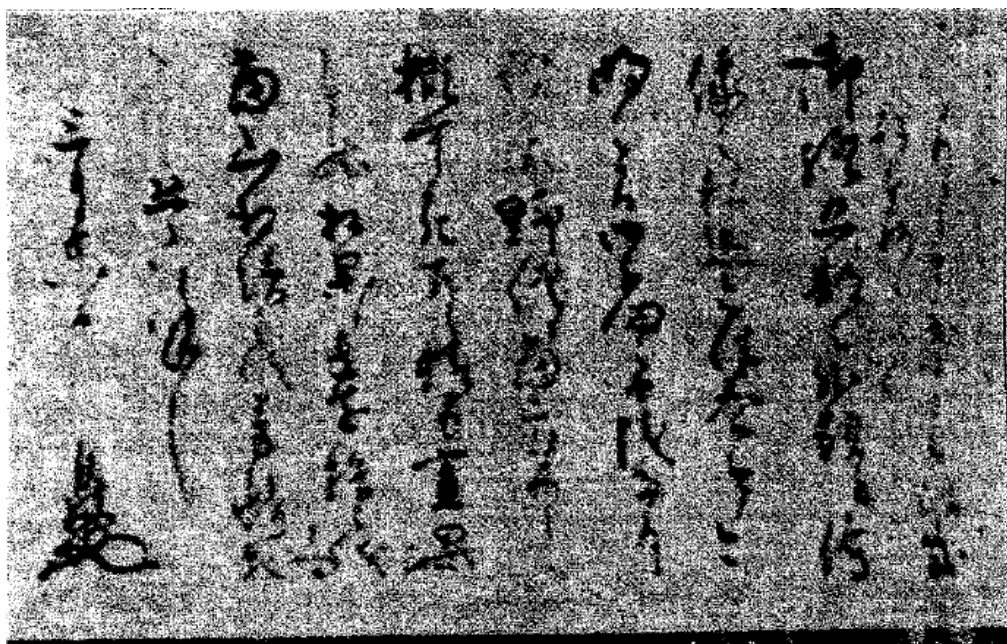
4. 日禪(にっしん)書状と日奥(にちおう)不受布施派の祖と大阪城対論

日禪(1561～1617)は日蓮宗京都本国寺の第 16 世で京都における日蓮宗の中心人物の一人と称され、究竟院(くきょういん)と号した。来住法悦宛及び来住家に関する文書が岡山県立博物館へ 18 通所蔵されている。文禄 4 年(1595)豊臣秀吉は諸宗に方広寺大仏の千僧供養会への出仕を求めた。しかし日蓮宗には不受布施の宗制があつて法会に出仕することは、封建権力に屈して宗制を破ることである、この法会に日蓮宗の僧の出仕の可否をめぐる教団内に対立が生じた。このとき不受布施の厳守と不出仕を主張したのが京都本国寺の日禪と、もう一人日蓮宗不受布施派の祖である日奥(1565～1630)安国院仏性院と号する僧で、永禄 8 年(1565)生まれ京都町衆の豪商の述藤兵衛の子で京都妙覚寺 20 世日典(にってん)につき出家し日典は日奥の資質を高く評価して文禄元年(1592)に京都の妙覚寺を日典から与えられた。日奥は千僧供養会には不出仕を主張して受け入れられず妙覚寺を退出して丹波小泉に隠栖したのである。

当時の日蓮宗教団の受・不受の対立は教団を二分する重大な問題であった。その後豊臣秀吉没後、慶長 4 年(1599)に徳川家康の命で、大阪城で受派の妙顕寺の日紹・日乾等と不受布施派の対論が行われた有名な「大阪城対論」である。あくまで不受布施派を貫徹を主張する日奥は慶長 5 年(1600～1617)まで対馬に流刑された。

5. 来住法悦あて日禪(にっしん)書状について

書 状 A



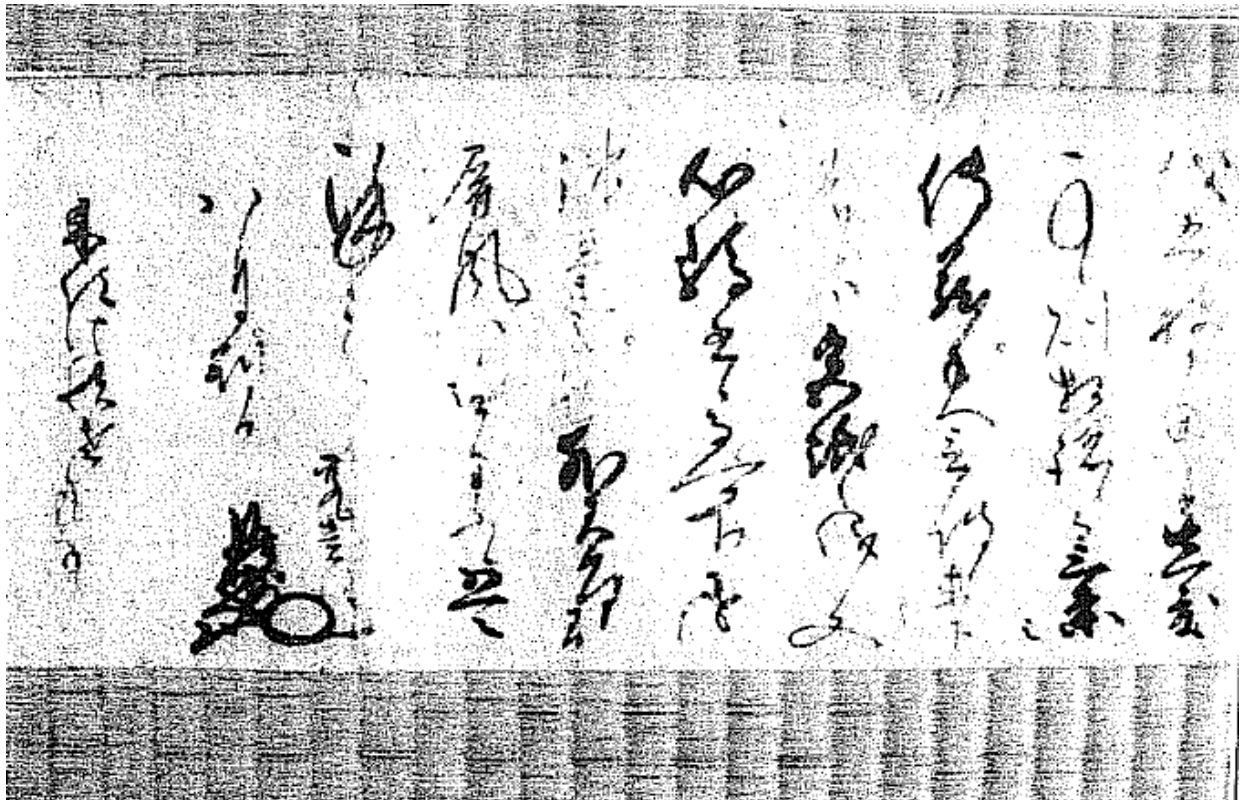
日蓮宗の僧、日禪も大阪城対論で権力に屈するのである。そして京都の本国寺を退去したのが慶長 5 年(1600)の 4 月末

頃であろうと伝えられている。京都嵯峨野に隠退したその地が常寂光寺である。本国寺を離れるその頃の動向を知ることの出来る書状で、来住法悦あて日禪書状が上記書状Aである。文書の内容は岡山県立博物館所蔵文書の 33 ページの「日禪書状」として解説しています。文面は「自分は今年中に死ぬかもしれない、精力も尽き果ててしまったので自分が死んだ後は寺の相続のことについてくれぐれも頼む」と書いてあり、文面の当山とは京都の本国寺の意味であれば、日禪が大坂城対論で権力に屈して本国寺を出る頃の手紙と考えられ、来住法悦と日禪の親交の深かったかを知る文書の一通である。この文書は岡山県立博物館の館蔵優品図録 103 ページ(73-A)の文章を参考にさせて頂いた。

6. 私の初見した来住法悦 あて日禪 (にっしん) 書状

私事で恐縮ですが、私の亡き父(以後父と記す)は郷土史が好きで、考古学・城郭・杜寺・氏姓研究等を常日頃から調査して雑記帳等に資料を残し貴重な郷土史本を大切に保存している。他界する数年前まで読書したりして日々を送っていた。90 歳までの長寿を全うした父であった。私もその様な父の後姿を見て郷土史に対する関心が芽生えた様に思う。休日には本屋に行き郷土史に関する本を探しに行ったり、図書館へ足を運んだり歴史の研究会へ参加し色々な分野の先生からご教示を戴いた。そうしたある日の事、今から約 20 年前ぐらいになる、父が箱の中から一枚の古文書と雑記帳を取り出して私に見せて説明してくれた書状が浦伊部の来住法悦へ宛の初めて見る日禪の書状であった。

日禪 (にっしん) の書状 写真B



7. 来住法悦あて日禪 (にっしん) からの補任状

写真Bの書状は父が昭和 35 年頃今から 50 年前に和気郡和気町衣笠でその当時に古物商をしていた八幡網治氏から買ったものと話していた。その時もう一枚の書状が店にあったのが日禪から来住法悦への補任状であった。この補任状は買わなくて、八幡氏の了解を得て書き写させてもらったと話していた。その記録帳には、昭和 35 年 8 月 10 日八幡網治宅にて写すと年月日が記されている。その補任状の書き写しは次の文書Cです。(原文は縦書きです)

南無妙法蓮華經
 来住法悦沙弥
 日住 花押
 右依為佛法之志異他仁
 所授与日文字如件
 天正十二年甲申曆夷則八日

この補任状は、来住法悦の嫡子来住弥三兵衛に日禪から永禄年間(1592～1596)に与えられる前の約10年前ぐらいに書かれた補任状と思われる。実物の文書であればと考えますが、父の書き写しただけでも大切な資料として保管しておこうと思っています。日禪からの補任状についての資料は岡山県立博物館 研究報告2 昭和55年3月の来住法悦関係文書の中で日禪書状が18通所蔵されていると記されている。日禪が補任状として書いているのは法悦の嫡子の来住弥三兵衛平豊景へ宛ての文禄(1592)□□曆7月○日の書状一通で他には見当たらなかった。父がその時来住法悦への日禪からの補任状を買っていたら今現在残っていたかもしれないと思います。

8. 来住法悦あて日禪書状と竹林栄一先生との出会い

私は倉敷中央図書館にて岡山県立博物館研究報告2 昭和55年3月の資料に「来住法悦関係文書」が書かれているのを知り執筆者は柴田一先生と竹林栄一先生でした。平成4年頃の時、その当時に学芸課長として勤められていた。私は竹林先生に電話にて「私宅に来住法悦宛の日禪からの文書を保管しているので調査確認をしてください」とのご連絡させて頂き、後日来訪され書状を確認してもらった結果、「間違いなし」との事であった。来住家文書等について色々教示してもらおうと共に、書状をカメラに収めて帰られた。数日後竹林先生からのお手紙を頂いた。和紙に毛筆にて達筆でお礼の文面が書かれていたのが印象に残っています。それとこの時に竹林先生が「来住法悦あての日禪書状」と題して朝日新聞に記された新聞の切り抜きを同封して頂いたのが、文面中の書状Aです。

今回仮称「きび」考の22年秋季号として寄稿するに当たり、テーマを色々考えた結果、日本先史古代研究会設立の場所が備前市伊部の地であったので、伊部地域でのテーマがあればと思いついたのが浦伊部の来住家文書を参照して文章にしてみようと思い書いてみた次第です。今から400年前の古文書から当時の人達の動向を知ることが出来る。その土地の古文書や郡・町・村誌を大切に保存して行くことが重要な点と感じられた。今回寄稿させて頂いたのですが、文面に於いて誤字等お気付きの場合にはご指摘して頂ければ幸いと存じます。

参考資料及び文献資料

- 岡山県立博物館 研究報告2 昭和55年3月「来住法悦文書」
- 国史大辞典
- 大日本地名辞書三巻 吉田東伍著



太閤門の碑文



筆者井上氏と太閤門

石垣は400年前からの来住法悦家の石垣

広大な屋敷跡が旧街道に沿って残っています。この屋敷の裏山の山麓に法悦が寄進した妙閑寺の客殿が今に伝えられている。豪商来住家は今日の大手商社格と井上氏は語ってくれた。(平成22年9月2日) 撮影 山崎泰二

吉備国の語源「黄蕨」調査報告書-2 黄蕨国の解析『突蕨国からの渡来者集団が建国』

日本先史古代研究会会員 丸谷憲二

1 はじめに

『創刊号』に『吉備国の語源「黄蕨」調査報告』として、江戸時代から戦前迄の文献調査結果を報告し、まとめとして「キハラと
のルビに注目しました。蕨の読みはケツ・カツでありハラとは読めません。岡山県の江戸時代から戦前までの研究者は『先代
旧事本紀大成経七十二巻本』の記録を「8本の黄色いワラビ」と訓読みし「黄色いワラビ」を植物生態学と考へ「ワラビの突然
変異」として考察しています。私は、この基本認識は間違っていると考えました。」と報告しました。

平成22年3月に岡山市瀬戸公民館(瀬戸町の文化財を語る会)、6月に備前市伊里公民館、7月に赤磐市熊山町中央公民館(熊山遺跡群調査研究会)にて、『吉備国の語源 黄蕨と羈縻(きび)政策 熊山遺跡出土品の考察』との演題で2時間講演を行いました。植物生態学としての「ワラビの突然変異」を間違いと考へ、地名学で考察し突蕨国にたどり着くまでの過程を報告します。

2 平成20年8月24日 吉備学会の発表後によせられた情報

2-1 備中古名『黄蕨』(キハラ)とのルビの解説(平成20年8月27日大井透氏 教示)

黄蕨の件ですが、キハラと読むのは漢字が本来持つ音韻とは直接の関係はないのではないかと思います。ローマ字表記をすれば分かりますが、黄蕨はKIWHARABIとするとKIHARAというように音が短縮して転訛(スル語の本来の音がなまって変化すること。また、その語や音。)した。また、KIBIとなり吉備津彦と戦ったウラは百済から来たといわれているので古代朝鮮語とも関わり合いがあるのかも知れません。

木村神社は本来、城村神社というように、キハラは本来、城原城の跡地の野原。黄蕨伝説のある大和朝廷によって滅ぼされた一族の城跡の原とともれます。それは、以下の例からあり得ると考えます。また、日下はヒノモトとしか読めませんがクサカと読みます。元来はひのもとの、くさか日下の草香というように掛詞が懸かり言葉の読み方に転訛したというのを聞いたことがあります。フィギュアスケートの村主章枝さんの村主は、スグリと同様に村主をしている 勝 秦氏(すぐり)の後裔です。また、東海林(地名)の庄司をしていてショウジと読むような例ではないかと私は考えています。

2-2 『ポリネシア語で解く日本の地名・日本の古典・日本語の語源』(井上政行 説)

古く縄文時代、日本列島に原ポリネシア語を話す民族が南方から渡来して住み着き、原ポリネシア語で地名を付けていたと思われる。その地名は昔も今も殆ど変わらない発音で生きて使われている。しかも、古事記、日本書紀などの古典や、日本語の語彙の中にも多くの原ポリネシア語源の言葉を見出すことができる。これまで意味が判らなかつた地名や、古事記・日本書紀の中の意味の判らなかつた神名・人名や、万葉集の枕詞や、いろいろの言葉の意味を発音が全く同じポリネシア語によって明らかにしようとする。これによって、これまで闇の中に包まれていた日本、日本人、日本列島、そして古代史の真の姿が見えてくる。岡山県の地名・吉備国の地名には、記紀所出のものが多く残る。

「キ・ピ」、KI-PI(ki=full,very;pi=eye)、

「眼(のような窪地・盆地)が・たくさんある(地域)」もしくは「大きな・眼(のような盆地＝津山盆地)がある(地域)」または

「キピ」、KIPI((Hawaii)revelion,revolt,to dig with a sharp tool)、

「反乱を起こした(地域)」もしくは「先細の掘り棒で掘ったような(細かい起伏がある。地域)」の転訛と解します。

3 日本語学による解析『黄蕨』の読みは・漢字音(呉音・漢音・唐音)

漢字を中国語の発音で取り入れた読み方。「行」の字を例にすると、ギョウ(修行・行者)が呉音、コウが漢音(行動・実行)、アン(行脚・行燈)が唐音である。

『万葉集』や『古事記』に見られる万葉仮名は「呉音」で読み、『日本書紀』に見られる万葉仮名は「漢音」で読まなければならないなど、同じ万葉仮名でも文献によって読み方は違っている。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の研究は、宮東孝行氏(宮東斎臣)の研究後継者である後藤隆氏(『先代旧事本紀大成経』刊行普及会代表)の調査が最も正確であると考えられる。後藤隆氏の調査では「推古 30 年(622)先代旧事本紀大成経成立。編纂者 聖徳太子・秦河勝」である。『黄蕨』は 622 年に記録された古代地名である。呉音で読むか、漢音で読むかがポイントである。漢音では「コウケツ」、呉音では「オウカチ」となる。

呉音	六朝時代・江南＝古代日本・仏教語関係
漢音	唐時代、長安を範とする北方音＝奈良時代以後・儒教を含む一般
唐音	宋音、南方・室町期以後・臨済禅関係

4 日本語表記の成立「上古の世にまだ文字あらず」

漢字が伝来する以前に日本語は固有の文字は持っていなかった。『古語拾遺』(斎部広成 大同 2 年:807 成立)は「蓋聞、上古之世未有文字」と書き出している。文字は政治の道具として重要だった。日本人が初めて接触した文字は中国の漢字であった。文字が無かった時代でも人々は語り部が口伝えで古くからの伝承を伝えていた。日本語が最初にめぐりあった文字は漢字であった。

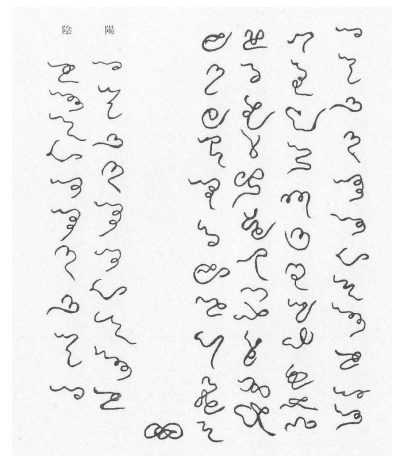
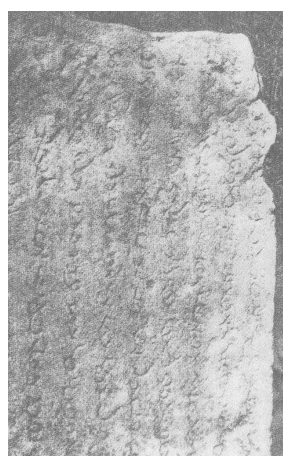
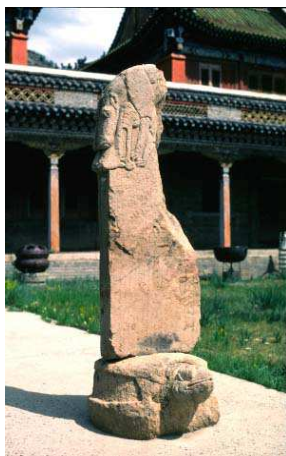
世界の文字は、表意・表音(一つ一つが音声上の単位に相当する文字)・表語文字(一つ一つの文字で言語の一つ一つの語や形態素を表す文字体系)に区分され漢字は代表的な表語文字であり、黄蕨は表意文字(一つ一つの文字が意味を表している文字体系)である。

「神代文字」で記録された太古文献(古史古伝:竹内文書=100 種以上の文字有り・九鬼文書=春日文字・宮下文書=アソヤマ文字・東日流外三郡誌=津保化砂書文字 等)は現在の学説では偽書とされている。

唐松神社(韓服宮:秋田県大仙市協和境字下台)の文治4年(1188)に書写された『天津祝詞』には、古代物部文字(アヒルクサ文字)で記されたヒフミ誦文が含まれている。

西モンゴル・ツェツェルレグ市の県立博物館の庭に亀趺の上に立つブグト碑文(建立 570～580 年頃)が有る。ブグト碑文には古代のソクド文字が彫られている。ソクド文字には数種類の文字の形態がある。古代物部文字にブグト碑文のソクド文字のみが類似している。物部一族と古代モンゴルとの結びつきが暗示される。唐松神社は物部氏の末裔が代々宮司職を継承する神社である。

進藤孝一氏は、物部氏の出自を「天降り伝承を持ち、緑なす森林を崇拝する氏族、朝鮮半島以北の緑の少ない地域の出であろう。北方系の蒙古族が朝鮮半島を経由して天降り・神宝などの伝承を取り込み、日本列島に渡来した説もある」としている。岡山県にも物部氏の末裔が代々宮司職を継承する備前国赤磐郡一宮・布都之魂神社(岡山県赤磐市石上字風呂谷)がある。



ボガト(ブグト)碑文のソクド文字

唐松神社の古代物部文字 (アヒルクサ文字)

5 地名学による解析

地名学とは「人が動けば地名が残る」という発想である。

5-1 国内 埼玉県蕨市

「わらび」という地名がいつごろから言われているか不明である。文献上の初見は、観応3年(1352)の「渋川直頼譲状写」(加世家文書)に「武蔵蕨郷上下」と記録されている。蕨市の地名の由来・3説有。

① 源義経が立ちのぼる煙を見て「蕨火村」と名付けた。

在原業平が蕨をたいてもてなしをうけたところから「蕨火」と命名した。「蕨火」説。

② 憎慈鎮の「武蔵野の草葉にまさる わらびをげにむらさきの塵かとぞみる」の歌。

近隣の戸田市や川口市に青木、笹目、美女木など植物名の地名有り。「蕨」説。

③ 和楽備神社

社伝によれば、室町時代に蕨を所領とした足利将軍家の一族、渋川氏が蕨城を築き、その守り神として八幡大神を奉斎した。

5-2 大陸 突厥国

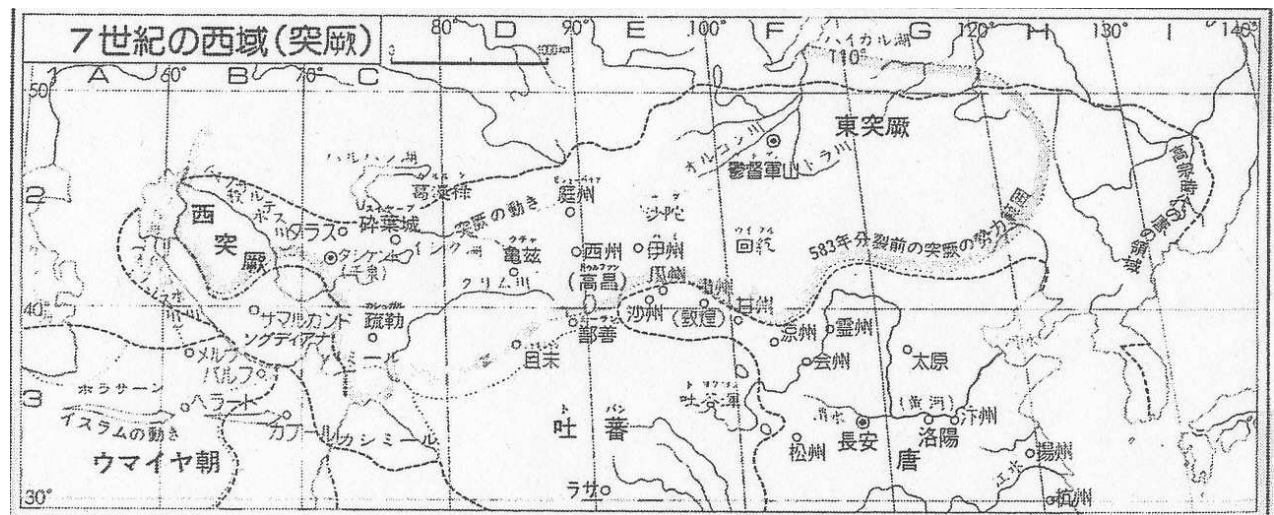
仮説 黄蕨国は突厥国からの渡来者(トルコ系民族の遠祖)が建国した。

5.2.1 突厥国とソグド文字

テュルクを中国人は突厥国と表記した。突厥帝国の成立は 552 年である。その中心になった氏族は阿史那である。阿史那氏は遊牧民には珍しい鍛鉄技術で勢力を伸ばした。テュルクとは兜の形をした金山に由来している。突厥は 583 年にモンゴル高原を本拠とする東(北)突厥と、中央アジアを支配する西突厥に分裂した。西突厥は天山山脈北方地域、東西トルキスタン

を勢力下におき、中央アジアが「トルコ化」していく道を開いた。分裂後は仇敵となり数十年交戦した。突厥国内にはソグド人が多く、突厥と中国・ササン朝・ペルシャ・東ローマ帝国を仲介する使節の役目を果たしていた。突厥初期の公用語・文字はソグド語・文字であった。

法隆寺の香木に焼き記された文字が 1986 年東野治之の調査がきっかけとなり、吉田豊氏(神戸市立外国語大学教授)によってソグド語と特定された。法隆寺は 607 年建立である。香木がいつのものかは特定されていないがさほど時代は違わないだろう。



7 世紀の突厥国の位置(西突厥国と東突厥国)

6 DNA による解析「日本民族の源流は何処か」

松本秀雄氏は、『日本民族の源流を考えると、日本人の Gm 遺伝子パターンの中でも、北方型の標識遺伝子である黄色の ab³st 遺伝子の流れに基づいて、「日本民族の基層をなす人々は北方型蒙古系民族に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と結論づけている。南方型蒙古系民族を特長づける赤の afb¹³b 遺伝子の頻度は 10.6% であって、中国東北部の漢民族とも全く異質のものである。現在の日本人には依然として Gmab³st 遺伝子が 26% の高さで保持されており、北方型蒙古系民族の

特徴が明確に保持されている。

日本人は、Gm 遺伝子の分布から見る限り、また ABO 遺伝子の分布からみても、アイヌと宮古の集団を除いて全土において等質である。シベリアのバイカル湖畔のブリアート人は日本人と酷似している。日本民族は、北方型蒙古系民族に属するもので、その起源はシベリアのバイカル湖畔にある。』と報告している。ロシアバイカル湖の近くに東突厥国があった。人口の増加とともに、流れの豊かなアムール河を下って日本列島の地に到達することは、さほど困難なことではなかったのではないかな。

「モンゴル語系の民族として、ブリアード人とモンゴル人がいる。HLA(ヒト白血球抗原)の研究によれば、日本人には主要な4パターンがあり、そのうちモンゴル人に多いパターンである、B52-DR2 は日本人全体で最も多く、北九州、山陽から近畿、山形、福島で12～13%以上を占めている。これは、モンゴル高原から入ってきたパターンではないか。」との徳永、十字説がある。磯貝正雄氏は、「中国地方、近畿地方の古墳集団は、縄文系対渡来系の仮想混血集団の混血率は2対8、及び1対9に最も近い。渡来人が日本人形成に深く関与したのは確かなことである。」と報告している。

7 突厥国と雅楽伝来史・「秦一族」

最近、雅楽が静かなブームである。とりわけ雅楽人気を高めているのが東儀秀樹氏である。宮内庁の式部職楽部で雅楽を学び、宮中儀式で雅楽の演奏を手掛ける。宮内庁を退職した後はフリーの雅楽師として多彩な音楽を披露している。東儀秀樹氏のルーツ、雅楽界の名家「東儀氏」の始祖が「秦河勝」である。秦氏は謎の一族とされている。

6～7世紀、聖徳太子の側近である。秦河勝が建立した寺社は数多く、京都太秦・広隆寺が知られている。秦河勝には多くの子供がおり、4男と6男が秦東儀氏を名乗り、やがて東儀氏と称した。彼らは雅楽と舞踏に秀で、聖徳太子が建立した四天王寺で楽人として大成し今日の東儀家へとつながっている。東儀氏は秦東儀氏であり秦氏であった。秦氏は古代日本における殖産豪族であり平安京を誘地・建設した。

『蘭陵王が率いた部族は、鮮卑・匈奴・柔然・勅勒などの諸民族による胡人部隊であった』。蘭陵王の曲には沙陀調音取が付いている。沙陀は沙陀族のことで、敦煌の北、ハミのあたりに居住する西突厥の一部が沙陀突厥と呼ばれていた。鮮卑・匈奴・柔然・勅勒は、モンゴルと先祖を同じくするツングース系統であり蘭陵王の一族は鮮卑族である。

8 阿波命神社と高祖神社

新羅・百済・高麗の名を冠した渡来氏族の神社研究は報告されてきている。はるか古代に渡来した人々の痕跡の研究である。しかし、突厥国からの渡来者を祭る神社の研究は皆無である。『突厥伝(周書・隋書・北史・旧唐書・新唐書)』より人名を抜粋して紹介したい。岡山県人が思い込んでいる黍国(キビ)と粟国(アワ)、阿波国の阿波のルーツは徳島県では無い。突厥国の阿波氏が、伊豆諸島の神津島の阿波命神社から徳島県へ移動している。瀬戸内市牛窓町の高祖一族は突厥国の高祖氏である。突厥国からの渡来者は神社の名前・祭神となっている。

『突厥伝(周書・隋書・北史・旧唐書・新唐書)』

沙鉢略(可汗)は、阿波(可汗)があまりにも勇猛果敢なのでそねみ嫌っていたが、この時先に帰ったので、阿波(可汗)の属領を襲撃してうち破り、その母を殺した。阿波(可汗)は帰るところがなくなり、西方の達頭(タルドウ)可汗のところへ行った。	阿波氏 阿波命神社 東京都神津島村長浜 1-2 祭神 阿波咩命 伊豆諸島・神津島の神社 延期式神明帳 伊豆国 92 社 阿波咩命は三島大社の本后にして神異を顕し島を造りて其の造れる島に鎮座し給う事は續日本後紀に承和七年(840)九月乙未伊豆國言ス賀茂ノ郡有造作島本名上津島。此島に坐ス阿波神ハ是三島大社本后也。又坐ス物忌奈ノ命ハ即前社ノ御子神也。
--	---

唐は 618 年の隋の滅亡と同時に、山西省の武将だった李淵が建てた国である。李淵は即位して高祖と称した。	高祖氏 ^{たかす}高祖神社 福岡県前原市大字高祖 1578 祭神 彦火々出見尊・玉依姫命・息長足比女命 糸島半島とその後背地には、物部連の祖である饒速日命 ^{にぎはやひのみこと}（彦火々出見尊）と、その一族を祭る神社が集まっている。 古代から怡土郡の惣社（中世怡土庄一の宮）と崇敬され、三代実録に元慶元年（877）九月二十五日発亥「正六位高礊比賣神に従五位下を授く」と有る。 高礊比売神とは高祖神社の祭神である。 官司職上原氏の系譜には怡土城鎮守高祖宮とある。 怡土城は前原市と福岡市との境にある高祖山（標高 416m）の西斜面一帯に築かれた古代山城である。『続日本紀』によると、天平勝宝8年（756）6月から神護景雲2年（768）2月まで約 12 年をかけて完成した。築城担当は吉備真備、途中から佐伯今毛人に交代し完成。
アシナ族には狼祖 ^{おおかみそ}説話がある。 545 年頃の部族長はブミン ^{ともん}（土門）であった。 土門の子が加羅、加羅の子が、俣斤 ^{イルキン}（在位 553～572）である。 彼は容貌が大変変わっており、顔の広さは一尺あまり、その色は赤色もはなばなく、目はガラスのよう、性質は剛暴で征伐をこととした。突蕨民族の場合、白人種のような突然変異の人間が時々生まれるようである。突蕨民族の行動範囲の広さを物語るものである。	土門氏 土御門神道本庁 鎮座地 福井県遠敷郡名田庄村納田終 天文方ができる以前の暦は、朝廷の土御門家・幸徳井家で作られていた。土御門家は安倍清明以来続く陰陽道の家柄で、代々、幸徳井家とともに暦の制作にたずさわっていた。 土門氏 土門子神社 旧満州国東満総省間島省琿春県春化村土門子嶺 祭神 天照大神 創立 昭和 14 年4月 5 日

9 考察

① 日本語学による考察

『黄蕨』は、古代地名であり、漢音で「コウケツ」と読まなければいけない。

『黄』は ^{こうてい}「黄帝」を意味している。神農の後裔（神農の八代目の末裔）で姓を公孫名を軒轅という。古代中国の伝説的皇帝である。五帝の一人で天下を統一し度量衡を律し八卦説、暦、天文、舟、竈などを作り、音楽を定め、宮廷制度を確立した。

② 地名学による考察

^{こうけつ}黄蕨国の、蕨は ^{とつけつ}突蕨国からの渡来者を意味している。

③ 「于時行宮庭一夜生八蕨、其長一条二尺、其太二尺五寸、其色濃黄、国有人神、云黄 光命、此草異草也」の「八」と「黄」は、^{しんのう}黄帝が神農（古代中国の皇帝）の八代目の子孫 であり偉大な皇帝であることを記録に残すための比喩だと考える。

「異草」と有り黄蕨国成立以前の先住民族の記録である。「是齋元_一神不_レ同_一異国諸神無_レ威、其法元也、先産_一十有三柱神等_一、先生_一天水建^{あきつひこ}大秋津彦神_一、次生_一地水建^{あきつひめ}小秋津媛神_一、此神坐_一黄蕨前国一宮_一矣、潤_一世界_一神、有_一威徳_一神、此二神者水方神也」

④ 『日本書紀』継体天皇 7 年（513）条に百済から五経博士が ^{たてまつ}貢 られたとの記録がある。儒教の聖典である五経中に『易経』が含まれている。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』は 622 年成立であり、「陰陽本紀」とあり陰陽博士によって記録された文書と考える。陰陽道の根柢が ^{いんようごぎょうせつ}「陰陽五行説」である。威徳神とあるように方位を基礎として記録されている。解読するためには陰陽道

の基礎知識が必要である。

⑤ 陰陽五行説による考察

陰陽五行説では一般の東西南北の4方が、中央を含め5方と考える。四方八方では無く五方八方である。各方位に五行を当てはめる。東＝木・南＝火・西＝金・北＝水・中央＝土である。この概念は季節にも当てはまる。それが五色である。方位には色がある。東＝春青・南＝夏赤・西＝秋白・北＝冬黒(紫)・中央＝土用・黄である。

⑥ 八の考察

八の呪術。柳田民俗学では古代日本の聖数を七とし、七から八に変化したとしている。

八幡宮・八重垣・八重事代主神・八所御霊(怨霊)・八王子等の八の起源は、「^{こうてい}黄帝」が^{しんのう}神農の後裔(神農の八代目の末裔)より発展したと考える。八は吉田神道の思想を表す聖数である。

⑦ 黄蕨前国一宮の祭神「天 水建大秋津彦神、地水建小秋津媛神」は、大日本国一宮・備中国吉備郡・吉備津神社、吉備津彦神社には祭られていない。

⑧ 黄蕨津神社・黄蕨津彦神社の祭神、「黄蕨津彦神」は^{とつけつ}突蕨国からの渡来者である。

10 まとめ

① 黄蕨国は、^{とつけつ}突蕨国からの渡来者(皇帝)が建国した国である。

② 黄蕨津彦命は、東突蕨国からの渡来者であると推定する。

東突蕨国からの渡来者だから黄蕨津神社、黄蕨津彦神社の祭神となっている。

③ 『騎馬民族征服王朝説(江上波夫)の後継者』・岡山大学東洋史専攻の^{やすこ}小林恵子は、古代日本を東アジア史の中に位置づけ聖徳太子の出身地を西突蕨国としている。

「黄蕨津彦命は、東突蕨国からの渡来者」との調査結果は^{やすこ}小林恵子説の一部を補説するものである。

④ 古事記(712年)・日本書紀(720年)が、吉備国と誤記し黄蕨国の正史を変えてしまった。国家権力による意図された誤記かもしれない。

⑤ 黄蕨国の^{うら}温羅伝説の正史は、西突蕨国と東突蕨国からの渡来者間の争いかもしれない。

11 追記

現在、『先代旧事本紀大成経』・『物部文書』は偽書とされている。古代史への初挑戦が偽書の検証報告となった。『別冊歴史読本 徹底検証 古史古伝と偽書の謎』の類似本が多く出版されている。各著者の結論は「古事記・日本書紀の内容と異なっているから偽書と認定する」である。逆に「古事記・日本書紀を、何を根拠に正しいと判断するのか」と質問したら返答できる研究者は居ないと思われる。神様の名前の由来・根拠を説明できない研究者が偽書説を発表している。

天和1年(1681)の徳川幕府による『大成経七十二卷本』(潮音本)の禁書・回収処分は幕府に届け出をせずに出版したことを理由に処罰していると後藤隆は報告している。

12 参考文献

①『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』平成11年小笠原春夫校注 神道体系編纂会

②『謎の根本聖典・先代旧事本紀大成経』後藤隆 2004年 徳間書店

③『ポリネシア語で解く日本の地名・日本の古典・日本語の語源』<http://www.iris.dti.ne.jp/~mukun/>

④『歴史文化ライブラリー151 日本語の誕生 古代の文字と表記』沖森卓也 2003 吉川弘文館

⑤『歴博フォーラム 古代日本 文字の来た道 古代中国・朝鮮から列島へ』2005 大修館書店

⑥『朝倉漢字講座1 漢字と日本語』前田富祺 野村雅昭 2005 朝倉書店

⑦『歴史文化ライブラリー 日本語の誕生 古代の文字と表記』沖森卓也 2003 吉川弘文館

⑧『世界の歴史⑩ 草原とオアシス』山田信夫 昭和60 講談社

⑨『シルクロードを知る事典』長澤和俊編 平成14年 東京堂出版

- ⑩『アジアの歴史と文化』竺沙雅章 1999 同朋舎
- ⑪『東洋文庫 223 騎馬民族史 2 正史北狄伝』山口信夫他 訳注 昭和 47 年 平凡社
- ⑫『東アジア 民族の興亡』大林太良 生田滋 1997 日本経済新聞社
- ⑬『聖徳太子の正体』小林恵子^{やすこ} 1990 文芸春秋
- ⑭『日本人の起源』山科ももじろう 2003 文芸社
- ⑮『データが語る日本の歴史』歴史教育者協議会 1997 ほるぷ出版
- ⑯『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』松本秀男 1992 年 日本放送出版協会
- ⑰『日本書紀 塗り替えられた古代史の謎』関裕二 2005 実業之日本社
- ⑱『岡山県史 第 17 巻 年表』平成 3 年 岡山県
- ⑲『岡山市史 古代編』昭和 37 年 岡山市役所
- ⑳『天文暦法と陰陽五行説』飯島忠夫 昭和 14 年 恒星社
- 21『幸せを招く陰陽術』石田千尋 2008 マガジンハウス
- 22『日本古代神祇事典』吉田和典 平成 12 年 中日出版社
- 23『新羅の神々と古代日本-新羅神社の語る世界-』出羽弘明 2004 同成社
- 24『海外神社一覧』 <http://homepage1.nifty.com/kitabatake/jinja8.html>
- 25『吉備津神社文書』藤井駿 昭和 30 年 吉備津神社社務所
- 26『吉備津彦神社史料 文書篇』昭和 11 年 吉備津彦神社社務所
- 27『吉備津彦神社要覧』昭和 7 年 吉備津彦神社社務所
- 28『吉備津神社記 全』明治 44 年 藤井奎之助 吉備津神社社務所
- 29『秋田「物部文書」伝承』進藤孝一 1984 無明舎出版
- 30『秋田・唐松神社にて』<http://www.nippon-bunmei.jp/tsurezure-10.htm>
- 31『世界の文字の図典』世界の文字研究会編 平成 5 年 吉川弘文館
- 32『別冊歴史読本 徹底検証 古史古伝と偽書の謎』2004 新人物往来社
- 33『陰陽道の本』1993 学習研究社
- 34『雅楽と歴史 II』<http://s-koubou.hp.infoseek.co.jp/rekishi2.htm>
- 35『三神たけるのお伽秦氏「雅楽」』<http://www.kitombo.com/mikami/0310.html>

13 参考講演

大阪国際宗教同志会 基調講演

平成 9 年 6 月 11 日

『民俗のこころと鎮めの文化・聖徳太子の正体』抜粋

大阪大学 人間科学研究科 教授 大村英昭

金光教泉尾教会神徳館 国際会議場

そういうふうと考えていきますと、いずれにしろ、日本仏教は、インド古典仏教からは相当、隔たったものでした。そのポイントはどこかと申しますと——時間の都合で、これ以上、詳しくよう申せませんが、確かに聖徳太子は、日本に仏教をもたらした方ということは明かですが、そのもたらした方が、梅原猛先生のお言葉を使いますと——実は、聖徳太子こそ、日本の「怨霊鎮め」の元祖であられたことをすごく強調された。それが、梅原猛の最大の学問的貢献と僕は思うのです。たいてい「怨霊鎮め」といえば、普通は菅原道真が元祖で、それを鎮めるために建てられた京都の北野天満宮は誰でも知っておりますけれども、聖徳太子を「怨霊鎮め」として祭り上げた文化事業そのものが、法隆寺にまつわるすべてのものだということを発見し、強調なさったのが梅原猛先生の大変なご慧眼だったと思います。そして、彼の言葉を使えば、「生前の聖徳太子にも増して死後の聖徳太子が、日本仏教の形を変えるのに重大な影響力をお持ちになった」といういい方をなさる訳です。この「怨霊鎮め」の感覚とは、多分、仏教が入る以前から日本民俗のこころとしてあったと思います。さらに言えば——梅原先生はあっさりこれを「神道」とおっしゃっておりますけれども——「古神道」と申してもいいような「民俗の」……つまり、はっきりいって、「仏教伝来以前の」感覚だ

ったと思います。ところが、たまたま聖徳太子は、そういう神道的「世界」の中に、法華經を中心とする大乘教典をお持ち込みなさった方……。そして古代国家の改築にまでタッチされて、繁栄させようとなさって、努力なさった方であられます。

これもまた、もし機会がございましたら、是非、小林恵子^{やすこ}さんの本を読まれるようにお勧めいたします。岡山大学の古代史学者です。文芸春秋社が非常に支援している人で、文春文庫に『聖徳太子の正体』という本がありますので、一度ご覧になって見て下さい。非常におもしろいです。ここまでは、大阪大学の古代史研究者に聞きましても、「(小林恵子^{やすこ}説は)大変、おもしろい意見ですけど、あんなにまで言われてしまうと、日本古代史がガチャガチャになりますから、あまりに恐いので、よう採用しない」というて、その世界(古代史研究者の中)では割合に知られているけども、誰も真面目には採り上げたくない説です。と申しますのは、例えば「聖徳太子は日本人でない」という意見——これは最近の古代史では定説と思うのですが——少なくとも、明治維新がでっち上げた「万世一系」の天皇家とは関係のない人だろうと思います。それはもう、定説になっておりましたけれど、この小林恵子^{やすこ}さんは、さらに「聖徳太子は西突厥人(トルコ系)だ」とおっしゃっている。西突厥とは鉄の文化を持つ騎馬民族の国で、当時、中国は煬帝^{ようだい}という偉大な大王が出てまいりまして、随帝国という統一王朝が成立していて、その頃に、その北方の騎馬民族の中に台頭してきた大王達頭^{たつとう}という人がいたのですが——これはササン朝ペルシャ側の史料とか、東ローマ帝国側の史料にたびたび出てくる名前で、当時、世界的にも有名だった——この随の煬帝との間でも、もちろん、北方騎馬民族内部にも葛藤がいろいろあって、この人がずっと、こっちへ移動して来て、とうとう日本に来了。そして「聖徳太子は、達頭その人だ」というのです。「これはもう、あまりの破天荒な説でございます。何が何でも、あのようなことまで言われると困ります」と、皆(古代史学者)がいうのですが、しかし、非常に説得力が豊かであります。まあ一度、お読み下さいませ。それは、「さもありなん」というところが多く、大体、鉄の文化そのものもおもしろいですし、今、播磨(姫路市)の斑鳩寺に、鉄球の地球儀があるのですね。世界に二つしかないのだそうで、どこから入ってきたのか判らない。古いことは古いものです。「地球が丸い」ということを知っていた。昔、僕らが学んだ歴史では、「地球が丸い」ということが判ったのは、ガリレオの時代でしょう。しかし、ずっと以前から、ササン朝ペルシャとか、あの辺では常識であった。ですから、古代にペルシャ文化が入って来ているといわれるのですけど、「このようなものを持ち込めたのは、聖徳太子一族以外には考えられない」とおっしゃっている。さらに、もっともおもしろいことは、「厩戸^{うまやど}のみこ皇子」という幼名自体、聖書の「イエス生誕」の話とそっくりですけども、それは、東ローマ帝国とかその辺との交渉があった一族と判れば、聖徳太子の話として持ち込まれて来ることも十分、考えられますね。

さらに、もっとはっきりしているのは、随の煬帝に向けて出した詔みことのり(外交文書)です。「日、出づる処の天子、日、没する処の天子に書をいたす。向かって申して日もうさく。恙つつがなきや。云々」と。これは、自分のところは東ですから「日出づる処」、おまえさんのところは西だから「日没する処」と、少なくとも同格に扱っているわけで、世界の端っこの小さい島国日本——当時の倭国——から、そのような非常識な手紙を貰って、随の煬帝ほどの人がまともに逢ったりするはずがない。逆にいうとこれは余程の人だったればこそ、すなわち、聖徳太子が北方騎馬民族の大王達頭であると判っていなければ、とてもあのような形で、そこから交渉が始まって、やがて遣隋使みたいな実際、ほぼ対等な外交を随の煬帝がすることは無い。と論証されまして、日本書紀で今まで謎といわれていたところが大変うまく食い込んで、この説を押し入れると、ストーンとほとんど確かに、謎が皆、解けてしまつて、非常におもしろい。

小林恵子^{やすこ}氏の紹介

古代史研究家。1936年生。旧姓・稲田。岡山大学法文学部文学科東洋史専攻卒業。

中国や朝鮮半島の膨大な史料を駆使し東洋史の立場から日本古代史に新たな光を当て続けている。

騎馬民族征服王朝説(江上波夫)の後継者。東海大学文学部歴史学科東洋史専攻 1969年度非常勤講師。

編 集 後 記

- 仮称“きび”考創刊号発行から3ヶ月が経過しました。当初手作り冊子ですから主な皆様にとの思いで100冊印刷しましたが、以外に好評で昨年の当会設立記念講演会に御出で頂いた120名全員にお届けすることになり増刷りいたし、最終的には300部近くになりました。

お届け先の中から一部を紹介させていただきます。

『・・・御恵贈いただきました資料は、図書館資料として広く県民の方々に御利用いただいております。今後とも、引き続き宜しく願い申し上げます。』

記

「 仮称“きび”考 」

平成 22 年 9 月 1 日 岡山県立図書館 館長 西山 猛

- 仮称“きび”考 2010 (22) 秋季号をお届けします。皆様のお手許に届く頃には、記録的な暑い夏であった吉備の里々にも黄金（こがね）の稲穂が満ち溢れて実りの秋を迎えていることでしょう。猛暑の中で寄稿戴きました皆様には編集者として御礼申し上げます。特に陶芸家の木村玉舟氏、延原勝志氏には備前焼の作家として仕込みの最多忙期と重なり大変な労作を寄稿戴きました。また井上秀男氏はこの会の生まれた備前市伊部にまつわる古文書を400年の眠りの中から、現代の我々に太閤秀吉や当代一流の豪商・文人の交流を再現された力作です。亡き父上の収集された貴重な資料が、これからどんな形で飛び出してくるのか皆様も楽しみにして下さい。

不肖編者（山崎）も弥生期の吉備をテーマに仮説2題を提起しました。考古学フアンの一人として専門家の踏み出せない大胆な仮説ですが、当の本人はそれを信じる吉備人のつもりです。愚笑下さい。前号に引き続き丸谷憲二氏の吉備の語源は黄蘗今回8ページの力作です。丸谷氏はこの夏も精力的に取材活動を展開なさっています。8月13日には靖国神社の前権宮司三井勝生氏と面談し、8月末には福井県への調査で、吉備国と若狭国の関係を調べてられました。これからの彼の執筆に熱がこもるものになりそうです。

当会の若狭会長は先の世話役会で、新春に一冊脱稿の予定で準備中とのことです。先生の冊子は何冊か出ていますが、これからどんな展開になるのか期待しています。本松一郎氏（吉備槌太郎）は「古代吉備の謎を探って」とした原稿を寄せて頂きましたが、そのワクワクしそうな寄稿文は次号の楽しみにしておきます。樋口俊介氏が締め切りぎりぎりに仮題「歩き遍路紀行文」を頂きました。相当の力作です。連載形式で次号から登場します。

- 岡山歴史研究会が10月14日後楽園の鶴鳴館で設立記念セレモニーが開催されます。当会の若狭会長も發起人の一人です。県下に多くの歴史系の活動が展開していますが、新しい岡山歴史研究会に期待が大きく懸かっています。個人参加ですので皆様個々にご参加ください。（私も發起人の裏方を担当していますので申し出ください）
- 今年は岡山県下で「おかやま国文祭」が開催されますが「瀬戸内想彫会展」が10月30日から11月7日まで備前市日生の加子浦歴史文化館で開催されます。木村玉舟氏が代表で22名の作家が「瀬戸内の魚」テーマの作品展です。皆様是非共、観覧をお薦めいたします。
- この冊子の読者の皆様へ寄稿をお願いします。近況でも紀行文でも勿論研究成果の自説でも大歓迎です。次号は正月号か新春号になる予定です。

山崎泰二

仮称“きび”考 秋季号 2010年(平成22)10月1日発行

編集委員 延原勝志 井上秀男 樋口俊介 本松一郎 山崎泰二
発 行 日本先史古代研究会
会長 若狭哲六 岡山県備前市東片上 771
事務局 岡山県岡山市中区桑野 504-1 山崎泰二方
電話＝086-276-6654 メール＝top@bosaisystem.co.jp
FAX＝086-276-2241